特攻
報
会
平成13年8月

第48号

〒105-0001　東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人　特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電　話　03(3432)1090
ＦＡＸ　03(3432)5567

編集人　田中賢一
発行人　木村元正

目次

教育勅語と特攻精神 …… 1
桜花特攻についての座談会（前）…… 3
待望のホームページいよいよ開設 …… 11
「レイテ作戦の記録」より …… 12
海上挺進部隊創設の由来 …… 20
忘れ難い人たち　回天⑧ …… 24
誇高き愛機屠竜で得た片道切符 …… 26

次号予告

桜花特攻についての座談会（後）
公刊戦史にみる富嶽隊と桜花隊
公刊戦史にみる第一神風隊
特攻戦死した人達の文集
忘れ難い人たち　回天⑨

教育勅語と特攻精神

長らく我々の耳目から隔離していた教育勅語について、更めて考えてみよう。

我々年輩の者は教育勅語を暗誦はできないにしても、大方は記憶に残っている。昔の小学校では祝日に校長先生が奉読し、子供は頭を垂れて聞いたものだった。あの光景、懐しい思出である。

敗戦後占領軍によって「軍国主義の源泉なり」と断罪され、それを受けて国会では「教育勅語失効確認と排除」の決議が行われた。ところが最近識者の間で、教育勅語再認識の動きが出ている。昨年五月頃だったか森首相が神の国発言に前後して「教育勅語にはいいところもあった」と言ったところ、大部分のマスコミはこれに反撥し、中でも朝日新聞は、「皇国史観の再現」とか「国民を戦争に駆り立てる原動力」などと叫んだ。これらの人間は果して教育勅語を読んだことがあるのか、明治二十三年に如何なる理由で教育勅語が領布されたか知っているのか、尋ねてみたいものだ。

教育勅語制定の根基

江戸時代の日本人の教育レベルは諸外国にくらべて決して低いものではなかった。道徳についてみるに、武士階級には武士道というものがあり、その根底には儒教があったが、世界的にみて高い道徳律だった。それは武士以外の庶民にもある程度浸透していたと思う。庶民の教育機関は寺子屋のような私塾だったが、ここでも読み書き算盤だけでなく、道話と称して道徳教育も行われていた。更に家庭に於ても躾と称し道徳教育が行届いていた。商人や職人の世界でも、主人や親方が道徳教育をなおざりにすることはなかった。

ところが明治開国に伴い西洋の文物が一度に入ってくると、自然科学の面で著しく立遅れていることが目立った。明治五年発布の学制で「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す」と謳い、全国民に教育を授けることに、上下を挙げて懸命の努力をし、その成果は著しいものがあった。ところが、自然科学の立遅れを挽回しようと急ぐの余り、知育偏重となり徳育が疎かになった。当時小学校は四年でこれが義務教育とされた。その上に高等小学二年があった。これら学校教育を卒えた者は、当時の庶民の知的水準より遙かに優れていた。それは単に知識だけであって、教育の偏向によって、道徳面では劣っていた為、社会に諸々の弊害を生じた。正規の学校教育を受けた若者は、知識を誇り親を軽蔑し、果ては敬神崇祖の念が薄らぐという弊風がみられるようになった。

それらの弊害は明治十年代半ば頃から現れ始め、明治二十三年二月の全国知事会議に於て、この問題についての建議書が提出された。そこで明治天皇はこれに対処方を文部大臣に御下命になり、井上毅、元田永孚等当世一代の碩学の起草に係る勅語が、同年十月三十日に領布されたのである。

ここでちょっと現世に照し眺めてみるに、明治初年知育偏重によって生じた弊害なるものが、具体的事例の記録がないのでよく分らぬが、昨今の歪んだ世相、就中少年犯罪の甚しいほどのことではなかったと想像する。少年の殺人事件が頻発している現在、明治初年に先人が対応したくらいのことでは、到底処理できそうもない。

勅語の内容について

先ずこれは如何なる形態のものかというと、勅語であるから天皇陛下が国民（当時の言葉でいえば臣

民）にお示しになったものであるが、末尾に〝朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾ウ〟と仰せられているのだから、国民だけでなく、天皇陛下を含む全日本人の守るべき道徳であると言うべきである。なおこの一行は明治天皇が御自から書き加えられたものと承っている。

全世界には多くの宗教があり、それぞれ経典があって信者に守るべき道を教えている。それらとこの勅語とでは、共通する徳目もあるが、教育勅語は独自のものである。そのことは冒頭に仰せられている〝我カ皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ〟とある。宗教の教祖にあたるものは我が皇祖皇宗であるという訳だが、それだけではない。続いて仰せられている、〝我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ済セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス〟となっている。要するに皇室の御先祖を中心に億兆の民が心を一にして培ってきた美しい徳が、教育の根源であるということで、明治初年の教育の乱れに対したしなめておられる。続いて次の徳目が掲げられている。

父母ニ孝ニ
兄弟ニ友ニ
夫婦相和シ
朋友相信シ
恭倹己レヲ持シ
博愛衆ニ及ホシ
学ヲ修メ業ヲ習ヒ
知能ヲ啓発シ
徳器ヲ成就シ
公益ヲ広メ世務を開キ
国憲ヲ重シ国法ニ遵ヒ
一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ

これらのことを心掛けて天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシと結ばれている。朝日新聞あたりが軍国主義というのは、このあたりのことをいうのだろうが、国を守ることは当然で軍国主義ではない。

ここに掲げられた徳目は、〝之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス〟と仰せられているが、全くその通りである。〝斯ノ道ハ実ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スベキ所〟と仰せられているのに、敗戦後弊履の如くこれを棄て去っている。占領軍の指示があってその時は止むを得なかったにせよ、独立を回復した後もこれを顧みなかったことに、今日の社会思想の混乱がある。

日本の国民教育の準拠

〝爾臣民父母ニ孝ニ〟から始るいくつかの徳目は、〝中外ニ施シテ悖ラス〟とある如く万国共通の徳目ではあるが、この勅語は〝我カ皇祖皇宗〟で始まり、〝皇祖皇宗ノ遺訓〟で終っている如く我が国独自のものと考えるべきである。これに準拠して教育が行われていれば、今日のように青少年による犯罪の頻発はない筈である。

特攻精神に具現

特攻隊となって国に殉じた烈士は、軍隊に入ってからは軍人勅諭を精神の糧としたであろうが、小学校以来身に滲みついていたのは教育勅語である。〝一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ〟を身をもって遂行したのが特攻隊員である。〝我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ済セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス〟

忠孝は我が国古来の道徳律である。靖国神社には戦死者の遺書が多数記録されているが、御祭神の数に比べて特攻隊員のものが断然多い。死ぬと決っているので、皆何かを書き残した。特攻隊員に選ばれたことは家門の名誉である、戦死の公報が届いたら、よくやったと賞めてくれと親に言っているものが少くない。そして異口同音に親に長生きしてくれと言い残している。

第七十七振式隊で、20年5月4日沖縄近海に散華した**相花信夫伍長**　少飛14期　の遺書の一部〝人生五十年、自分は二十才まで長生きしました。残りの三十年は父母上に半分ずつさし上げます〟正に忠孝一本である。

勅語では「父母ニ孝ニ　兄弟ニ友ニ」とお諭しになっている。祖国存亡のときに、この諭は特攻隊員にどのように受けとめられたか。

第三草薙隊で、20年4月28日沖縄近海に散華した**大塚晟夫少尉**　中大専門部　海軍予備生徒1期　に妹に与えた日記風の遺書がある。その一節、

〝はっきり云うが俺は好きで死ぬんじゃない。何も心に残すところなく死ぬんじゃない。国の前途が心配でたまらない。いやそれよりも父上、母上、そして君の前途が心配だ。心配で心配でたまらない。皆が俺の心を察して、今まで通り明朗に仲よく生活してくれたならば、俺はどんなに嬉しいだろう〟これが父母兄弟に対する思いである。

教育勅語は形をかえて特攻精神に現れている。

海軍神雷部隊
櫻花特攻について座談会

平成13年4月22日　水交社に於て

應答者
海兵71期神雷部隊櫻花隊分隊長
元海軍大尉　湯野川守正

質問者
自衛隊空提教育隊二尉久我健児
東洋大学　学生　牟田陽一
明星大学　学生　久田広光
（学生2人は金城和彦相談役推薦）
陸軍空挺隊　田中賢一

司会進行・記事編集
飯野伴七　元海軍大尉戦闘機

はじめに

飯野　それでは非常に貴重な時間を割いていただいて遠路を集まっていただきました皆様に湯野川さんのお話を聞きながらいろいろと進めていきたいと思います。とくに学生さんには世の中も五十何年たっているのでお分かりにならないことも多いと思うんですが、話の都合上いくつか私が項目を挙げておきましたので、それによって話を進めていただければ結構です。久我さんにはまた専門的な仕事をしておられ、社会人として大いにやっておられる、その面からもかつての特攻隊の心意気だとか、あるいはどんな訓練があったか、ということを専門的な見地からもお聞きいただければありがたいと思います。

先ず湯野川さんから、この神雷部隊が発生して、海軍の中でどんなふうに位置づけられ、また特攻の中でも中心となった神雷部隊ということについて総括的なお話をお願いしたいと思います。

湯野川　櫻花概要を私の方で五部用意しました。これは去年の十月に出た「海軍航空隊と神風」というものですが、これは「特攻と終戦」という題で私が書いております。これを見ていただくと分かります。それをお手元にお配りしました。

湯ノ川　　久我　　速記者

特攻の容認から終戦迄

それでは話を進めます。資料をご覧になりながら話を聞いていただきたいと思います。―櫻花資料末尾附記―

最初に「特攻と終戦」ということで簡単にお話ししますが、二ページ目の一番下の欄の真ん中ぐらいに「特攻応募の我々の判断は現在の平和に生きる人々には推測は無理である。自分自身をその渦中におき、当時得られた範囲の情報により決意しなければならなかったのだから、第三者の理解は到底得られるものではない。」

時代は全く違いますし、そういう渦中に身を置くことはできないし、理解をしようとしてもできないのが当たり前だというふうに私は思ってます。

今日しゃべる私は桜花隊の分隊長であり、一応戦士として育てられた人間です。歴史家でも何でもありません。「戦士は最善の戦法を駆使して戦うことが使命であり、祖国が戦争に敗けて良いという思想は皆無である。戦争の合理性の有無、継戦の是非等の判断は、戦士の使命の彼方にあり、最高統師部の仕事なのである。」

組織にはそれぞれいろいろな役割がありますが、私たちは戦うために育てられた人間で戦い専門です。戦いの大きな判断をしたり、思料をしたりするのは最高統師部の方であって、戦争は合理的であるとかないとか、あるいは戦争を続けるべきだとか、やめるべきだとか、そういう判断は最高統師部の方がおやりになるのであって、われわれ戦士は全くそういうことの決定に基づいて働くという、そういう立場であ

学生　　学生　　飯野

ります。そのへんの二点を頭に入れて聞いていただければと思います。

開戦のとき、特攻ということはもちろん全くなかったわけです。特攻なんていうことを思ってきたのは、昭和16年に戦争始まりましたから、18年の半ば頃から急速に思ってきました。終戦のときは日本は非常にたくさんの特攻部隊がありました。飛行機の方も水上の方も水中の方も。回天というのは水中の人間魚雷です。それに対して空中の魚雷みたいなこういう格好をしてるのは桜花ですけれども、そういうたくさんの部隊が十九年の秋以来特攻部隊として戦っておりまして、さらにアメリカの本土上陸作戦に備えていろいろな新しい兵器を準備して待ち構えつつありました。だけど、それらは戦争が終わって全く使われませんでした。

ソロモンでじりじり押されて敗け始めた頃から、特攻は必要だという意見がたくさん出ました。そのへんは「特攻の進言と海軍上層部」ということにる書いてありますからあとで目を通していただければ結構です。

搭乗員募集―熱望多数

けれども、18年の6月までは、さらに19年の7月から特攻の搭乗員を募集したんですが、19年の6月までは搭乗員が必ず死ぬというような航空特攻は、「まだその時期でない」というふうにいって強く上層部はつっぱねまして、これらの意見を採用しませんでした。しかし、マリアナ沖の海戦でアメリカに完敗して、空母の中心の第一機動部隊、それから陸上の第一航空艦隊、どっちも壊滅して、それから今までそういう特攻を一切許可しなかった上層の空気が一変しました。それで8月からは特攻、生還不能の新兵器のそういう希望者を募集しております。

私は8月中旬の募集を求めるときにすぐ「熱望」と書いて上司の飛行長に出しましたけれども、募集のときに「不望」という、特攻を望まずという搭乗員も結構いました。特攻だと一発勝負で終わってしまうものですから、一発勝負でなくて、今までと同じような戦い方で何回でも敵と戦って天下を分けて戦い続けていくことが大切だと判断した連中が結構おりまして、熟練搭乗員にその傾向があったんですけれども、「不望」と書いた人もたくさんおります。応募した人にも「熱望」あり、「望」ありだったんですが、「望」と書いた人の中には消極的な志望者もいた。従来戦法で戦って戦果を挙げなくちゃいかんということは分かってるけれども、従来戦法では戦勢の挽回が可能とも思えないから、しょうがなくて「不望」としたという人があった模様です。

予備学生について、学徒出陣なんかもあるんですけれども、学徒出陣は18年の12月です。その前に9月の半ばにたくさんの予備学生が志願して海軍に入ってますが、それに対してもこの8月に募集したとき、海軍省の人事にいた鈴木さん、予備学生の三期ですが、この方に状況を聞いたら、もう「熱望」「望」が圧倒的に多かったと。「不望」はほとんどなかった。もちろんあったけれども非常に少なかったと。「熱望」「望」の中からこれをという搭乗員を厳選して特攻隊員に決めたんですよというふうにいっておられました。この特攻隊の募集がもう一年二年早かったら特攻隊の希望者は非常に少なかったんじゃないかと思いますけれども、ゼロであったとは全く思いません。

突発的に発効した特攻行為というのはいくつもありました。例えば17年の5月サンゴ海海戦のときにわれわれの海軍の偵察機が行って敵を発見して、すぐ電報を打って攻撃機が出てきて、攻撃機と途中ですれ違うときにその偵察機は燃料切れを承知で反転してわれわれの攻撃隊を誘導して、相手の空母をやってます。

6月中旬の終わりに発生したミッドウェーの空母戦、こっちがこてんぱんにやられて四隻の空母を失うんですが、そのときに友永大尉はすでにミッドウェーを攻撃して帰って来られて、飛行機が創ついてまして、燃料が片道燃料しか積めないのを見て部下は「私の飛行機に乗ってくれ」といったんですが、「いや、いいよ」と笑って出て行かれた友永大尉もいましたし、それから「翔鶴」の搭乗員の宮沢一飛曹ですが、自分の母艦の方に敵方の攻撃の魚雷が間違いなくぶつかると零戦ごと突っ込んで魚雷を自分の飛行機で破壊したんですが、こういう特攻が突発的に発生したものがいくつもあったことをわれわれはよく知ってました。

今の空気と違って当時は、「背景には、一旦緩急あれば義勇公に奉じるの土壌、合意が存在し、銃後（国家、社会、同胞、報道機関等）への信頼があり」、軍人も、戦死したら国家はもちろん、郷土の人たちも大事に家族を見てくれるし、一族一門の名誉であるという確信があったから、危険を顧みず身をもって任務の完遂に努める。今の自衛隊もこういうことをおっしゃってますが、むしろその中でも自分の身を捧げるということを競争する空気みた

いなものすらあった。

でも、通常兵器や戦法で戦い得ると考えているときには、一般的には決死的な戦闘までで、こういう必死のものは起こりません。

私なんかはその一年前にガダルカナルの撤収を終えて5月に内地に帰ってきたんですけど、臨時勤務したところの飛行長は、前のページに書いてありますけれども、「もうなまじっかの戦いではだめだよ」ということをおっしゃったときに、飛行長のおっしゃることの厳しさは分かったけれども、だからといってそういう体当たりを考えずに翌月から戦闘機の学生をやりまして、霞ケ浦や大分、筑波とやってきました。

筑波のとき階級は中尉、今の二尉でしたけど、図演（図上演習）を二人の五十七期の指導幹部で実施しましたが、私はアメリカ側の部隊指揮官で、見事に勝ちました。日本軍が敗けて、そのすぐあとに起こった実際のマリアナ海戦もさっき申し上げたようにこてんぱんにやられてマリアナが敵の手に落ちました。

7月の初めの朝礼で司令が「戦争はものすごく厳しくなった」と部隊全員を集めて話されて、私たちもことの重大さを実感しておりましたから、搭乗員のわれわれがやらん限り戦争の帰趨は明瞭である。それでじりじり押してくる敵との戦いに先輩、同輩、あるいは一部後輩も次々と倒れていく中で自分だけが生き延びるものとは考えていないし、あとに続く者を信じて、いつか自分も倒れるだろうという運命を確信したときの兵器、戦法の選択でした。それで何の迷いもなく「熱望」と書いて出したわけです。

次は陸軍の五十三期前後の方々なんですけど、「私は特攻を出さなかったよ」という方がおられますけど、そういうことは海軍ではあり得ないんだということをほぼ一ページについて書いております。

終戦―長官の一声

20年になりまして終戦になったわけですね。終戦のときの空気、これを一番最後に書いてありますけど、第五航空艦隊という艦隊で、私も一番末端指揮官として参集を命ぜられて行きましたけど、8月15日の御前会議の模様を参謀長と横井少将が話して、海軍としては高松宮様まで使って継戦を主張されたんだけれども、天皇陛下のご決心が強くてだめだったということを説明してくれました。だけど各部隊長は、戦争継続が必要だ、本土決戦をやらなくちゃだめだということを随分叫ばれて沈静しなかったんですが、参謀長自身も終戦決定に非常に不満な口ぶりでした。そのときに、五航艦長官の宇垣さんが終戦の日沖縄に突入されて、その後に着任した草鹿龍之介長官が発言されて、「経緯は今参謀長が申した通りである。私は聖慮を受け大命に従う。納得し難い者はまず私を血祭りに挙げたのちに行動されよ。今日まで必死に戦ってきた諸官の血祭りになったとて私は悔やむものではない。だが、私を血祭りに上げず、私が指揮を取る以上は、諸官の命令への服従を要求する」。非常にきっぱりいわれまして、興奮の渦巻いていた会議場、ほんとに静まり返りました。

そんなことで戦争が終わって復員したんですけれども、海軍の一部はそうでないところもありましたけど、海軍の復員は非常に整然としておりました。

十四ページ下の真ん中ぐらいに、即日小松に帰隊。状況を隊員に伝達したが、みな静かに聞いて特別な発言はなかった。

8月20日五航艦長官電により部隊は解散準備に入り、21日夕暮れ、特攻隊、桜花隊は全員飛行場の一角に集合、部隊解散を厳粛に挙行。足立飛行長が解散に当たっての宣誓を行なわれてみな復員したわけです。これひとえに天皇陛下のご決断が立派であったということをこの場を借りて明らかにしたいと思います。

これが大きな特攻の流れなんですけど、これだけ説明して、あと次に入ります。

神雷部隊の活躍

神雷部隊とは何ぞやということをよくお分かりになってる方は少ないと思います。「神雷部隊特攻出撃の記録」に書いてあるのは、第一から第十までの桜花隊、陸攻と桜花としてあって、陸攻隊の出撃の記録です。

陸攻隊は20年3月21日までにほとんど完全にやられて、陸攻隊と協同して戦うことができないという判断で、3月21日の三日後、24日にわれわれは桜花隊員だけで建武隊という、零戦五二型で、爆装五〇〇キロ、今までの戦闘機には二五〇キロしか積めないんですが、初めて五〇〇キロを積んで、それで建武隊を組織して出た。建武隊の後に筑波隊とか、習志野隊とか、神剣隊とか、いろいろな部隊があります。これは日本の練習航空艦隊が20年3月に全部じゃないけどかなりの特攻部隊が作られまして、それが全部神雷部隊の

下に入れられたわけです。神雷部隊の作戦指揮下で出撃したもんですから、全部神雷部隊に入っていろいろな記録に残っております。

最後に書いてありますように、これは搭乗員、整備員が入ってませんが、戦没者の総数は八百二十九名。そのうち聯合艦隊布告で二階級特進を受けた七百十五名という膨大な戦没者を出しました。八百二十九から七百十五差し引きの百十四の戦死、殉職、いろいろありますが、特攻隊出撃者が特攻として認定されなかった未帰還者がたくさんあるわけです。このへんの状況は非常に複雑ですから、ここでは述べません。それがこの神雷部隊の大要です。

一般に神雷部隊というと、桜花と陸攻と組み合わせたもので、これは昭和62年の「海軍神雷部隊作戦年表」があり、神雷部隊が編成された時期から8月15日の終戦までのものをいわゆる桜花、研究開発も含めて桜花、陸攻、戦闘隊を含めて一表にしたものです。これをあとで眺めていただくと編成から終戦までの足跡がよく分かっていただけると思います。個々の問題は説明はいたしません。

これで概略の説明は終わりまして、あとご質問を受けましょう。

質疑応答

飯野　ありがとうございました。非常に筋の通ったお話をいただいて、とくに私など当時その衝にあったものでよく分かります。ただ学生諸君には背景がなかなか理解しがたいところがあると思うんですけど、そのへんはこれから質問に移りたいと思います。

これが質問の要項としていいんじゃないかとテーマを私が取り上げてこの会を進めていきたいと思います。

あるいはさっきもちょっと触れられたけれども、「志望」とか「熱望」とか、そういうふうなやり方の編成をされたという話がありました。それはかつての同じ年ぐらいの方か、もっと若いのが、どうしてやったんだろうかという疑念が湧くと思いますけど、そういうところもフレッシュな気持ちでお尋ねください。久我さんにはもう少し専門的なご質問をお願いできればと思ってます。

いま私も一番疑問に思っていた編成はどうだろうということ、お話しになりましたよね。志願ということ、志望ということ。先ず人員の編成についてお話下さい。

湯野川　一口に戦士といってもいろいろありましてね、ちょっとお話ししたように予備学生ということが出てきました、そのほかに海軍で戦うために訓練された予科練というのがありましたね。予科練も甲飛、乙飛、丙飛、特乙、四つある。そのほかに予備練、これは昔の逓信省、今の運輸省みたいなものですが、そこで飛行機の練習をやりまして、そこを卒業して海軍に入った、こういうのもいました。その前からいたのは兵隊さんから上がってきた操縦練習生・操練。もう一つ逓練といいますけど、そういう人たちがいました。われわれみたいに兵学校出もあり、それから機関学校からたくさん飛行機にきまして、そういういろんな出身のごっちゃ混ぜで、海軍に入る動機もそれぞれみんな違うんですね。われわれの兵学校だけのもかなり違いがありますが、それはさておいて、予科練あたりから来たのは、乙飛なんかの、昔の高等小学校というのは中学二年までしか行ってないんですね。それから英才教育をやるために優秀なのをたくさん採ったわけですけど、甲種は中学四年。卒業がみな違う。乙種とか、そういう人たちは何のために海軍に入るかというといろいろあります。そのほかに操練もありますが、勉強するために海軍に入った人もたくさんいるわけです。もちろん生活のために入った人もいる。国家のために役に立とうという人も一割か二割いたかもしれませんけど、最後の頃と最初の頃は違いますよ。ほとんどが海軍に入る動機はみなまちまちで、そういう連中がずっと教育を受けて、特攻の希望を採りましたから、百人百様ではあったんです。

意外と多いのは中学校二年までしか行けなかった。あと学校へ行けない。海軍に入って勉強するという人が意外と多かったですね。

久田　いまおっしゃられたほとんどが海軍に入られたのは生活のため、勉強のためというのは。

湯野川　とくに乙飛ね。中学二年までしか教育打ち切りで、あと青年学校へ行ったり、自分の仕事についたりした人が多いんですね。

久田　とりわけ兵学校出身の方で特攻隊に志願されるときというのもさまざまな葛藤があったのではないのかなと思うんですけれども。

湯野川　「葛藤」という言葉は百人百様ですけれども、「熱望」あり「望」あり、私は「熱望」をやったんですけれども、葛藤があった人もあったでしょう。なかった人もあったでしょう。長男の人なんかそれなりの葛藤があったでしょうね。家を継がなくちゃならんので。それから自分の身内に自分が将

来面倒を見なくちゃならんような兄弟なんかあったらかなり葛藤があったでしょう。

それから入ったときは皆さんいろいろあるけれども、将来の海軍の提督を夢見て入った人も多かったと思うんですよ。われわれも多分入ったときはそんな気持ちで入っている。それから腰の短剣、カッコよさに憧れて入った人もいる、いろいろさまざまだけれども。

兵学校の四学年、われわれは最後の四学年ですが、18年以降三年しかなかったけれども、飯野さんたちが最初の三年だったですね。教育されてるうちにがらっと空気が変わりますね、入ってから。私は「戦士」としてという言葉を使ったけれども、戦うために養成されてるな、教育されてるなという気がしたから、私なんかの望みは例えば戦闘機の南雲少佐とか、それから皆さん知らんだろうけれども、第六潜水艇の佐久間艦長とか、旅順港閉塞の広瀬少佐とか、そういった人たちの生き方に近いところに行きたいなという気が卒業のときにしてて、陛下から恩賜の短剣をもらって偉くなろうという気持ちは、勉強もできなかったけど、なかったですな。

兵学校の場合は半分以上は私なんかと同じじゃなかったかしら。「よし、戦うぞ」という。

久田　当時の仲間の方も同じような思いで。

湯野川　私たち「同期の桜」「続同期の桜」「続々同期の桜」、こんな分厚い五百数十ページの本を三冊作ってまして、それを見た限りでは似たようなのが多いですな。内心の内心までは分からないけど、もちろんそういう優秀な成績で出て天皇陛下から恩賜の短剣をもらおうと思った人もそれはいたでしょう。でも僕みたいに学校の成績が中位のはそんなこと全く考えてない。「よし、立派な戦士になろう」、そういう気になっちゃうように教育されてる。

久田　立派な戦士になろうというときに、やはり何かを守りたいという思いがあったんですか。

湯野川　そんな難しいことはあまり考えなくて、だって、時代が違って恐縮だけどね、「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」という言葉をいいましたけど、小学校のときに教育勅語の十二項目、父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し、まだ覚えてますがね、全部覚えてる。そういう教育勅語の人間の進む方向というかな、そういうものが一通り頭に小学校の三年、四年ぐらいに入っちゃう。

兵隊になると、軍人勅諭というのがありまして、一つ、軍人は忠節を盡すを本分とすべしという項目から礼儀とか、最後は武勇か、そういう教育を受けて、教育勅語の土台と軍人勅諭と両方絡み合って一つの考え方の基本というものが大ざっぱな柱があったんですね。もちろんそのほかに、精神的な五省、五つの反省もあったけれども、教育勅語と軍人勅諭の二つが大体兵隊さんのものの考え方の柱になったような気が私はします。そんなに大きくばらつかなかったような気がします。

もちろん誰でも命は惜しいし、偉くはなりたいし、早く死にたくない。それは当たり前の話です。誰でも。その中でも何かことを考えるときには考える柱があったような気が私はしてます。さっきいったような三つの分厚い本を読んだ限りでは、大体似たようだったかなと思いますね。ある人は金太郎飴みたいだという人もいるけど、そうじゃなかった。それはまちまちだったけれども、大きなところの考え方は、「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」というような土壌があったように思います。

久我　では少なからずとも心のなかには死ぬのは怖いなという、そういう気持ちもやはりあったことは確かですか。

湯野川　人によるけど、戦闘に行ったとき、いずれ死ぬなと思ってました。

久我　それでもあえて「熱望」と書かれた。

湯野川　私の場合はね。戦闘機で戦って、私は指揮官ですからね、あと予科練とか予備学生とか引き連れて戦わなくちゃいかんけど、戦って優秀な性能の敵の飛行機、技倆も優秀な、最初は零戦で相手と戦ううちに、向こうが三対一以下でやっちゃいかんと。四対一ならいいけど、三対一以下で零戦で戦っちゃいかんよと。三倍の兵力でしか戦わなかった。それが昭和17年頃ね。

18年の半ばになってくると、向こうの飛行機P－38ぐらいまではそうでもなかったけど、グラマンF－4とか、いろいろ出てきて、18年の末になると同F－6なんて強かったですね。そういう状況を知ってるし、われわれの教員にもソロモン帰りがたくさんいるし、話を聞いてみると、とてもとても訓練時間も短い、教育期間も短い連中を引き連れて敵と戦って、先輩以上の働きをして勝てると私は思えなかった。そればかりじゃないけども。よし、私はたくさんまとめて向こうの船を沈めてやる方に回ろうと。理想通りにいかん話がまたあとで出てくるでしょうけど。

そりゃ命が怖いと思うのは、思わない人はいないんじゃないですかね。全員が。飯野さんなんか戦闘機でずっと

B―29と戦ったけど、戦うときには相手をやっつけることしか考えないけど、やはり怖いですよ。

飯野　桜花自体について聞いてみたいことは。

田中・一式陸攻から桜花へ乗り込むには、その構造はどうなっていたんですか。

湯野川　そこに図面がありますが、一式陸攻の中部に桜花に乗り込むような穴が開いてまして、そこをスルッとはしごを下へ入って上の風防を閉めれば。風防を開けて上がってくればまた上がれるんです。

桜花に乗って敵の上方まで行って下からガンガン撃たれて、しかも下は雲で敵がよく見えなくて、乗ったままさんざん撃たれてまた上がってきて生きてるのがいますよ。「だめだ、これは攻撃できない。上がってこい」というと、また上がってきて。声は通じてますからね。

久田　上がってきたらその時はどうやって合体するというか。

湯野川　そのままま戻ってきてそのまま帰ってきて、桜花に人が乗らないだけで。これは全員一人残らず桜花隊の連中が一式陸攻で鴻池の第二飛行場という二千三百メートル滑走路との砂浜があります。一式陸攻が上がり、十分な高度を取ると切り放してバーッと桜花隊が降りてきてササーッと砂浜にソリで降りるんです。みんなそうやって桜花に乗ったり降りたりして自分で操縦してみてやってますからね。二百名近くで事故は三件。

久田　相当な訓練がなされたんじゃないですか。

湯野川　そりゃあしますよ。いきなりそんなところに落とされてスルスルスルなんて着陸できる名人いませんからね。その前、戦闘機零戦でエンジンをしぼってスーッと同じようなコースを何回も降りて、もう大丈夫だというところで初めて桜花に乗る。

久田　じゃ、零戦で訓練を。

湯野川　もちろん。スイッチを切って何回もやってね、「よし、大丈夫、行こう」といって、それで初めて桜花に乗る。それでも事故三件。一番最初に乗った私の一期上の仮屋さんが殉職して、11月の末になって北という乙の十七期だったか、それが殉職して、その次は翌年の20年1月に佐伯というのがバーンと弾んで落ちて怪我して、いま生きてますよ。私の手元の二百名では事故はその三件だけ。あとはみんなスーッとうまくいってね。

牟田　桜花がどういった兵器であったのか、その性能全般についてのお話をお聞きしたいと思います。

湯野川　要目はアメリカの方が非常に詳しく調べたし、巻末に配ってあるでしょう。細かいことを言わずに大ざっぱに言うと、昭和8年の6月か7月、横須賀に航空技術廠、空技廠の長が和田操さんという大西中将より一期上の方ですけど、その方がこの桜花を作るように言われたときに「これは制空権がなければこの方法はもったいないよ」というふうにはっきりおっしゃってる。全くその通りで、制空権があるところでこれを使ったら面白いけど、制空権がなくなった20年にこんなものを使うべきじゃない。いうならば昭和17年の秋ぐらいまでに南太平洋海戦ぐらいまでのにこの桜花を使ったら面白いことになったなと思うけれども、19年から開発して、一番最初に使おうと思ったのが20年の初めにフィリピンで使おうとした。19年の12月の23日にフィリピンで使おうとした。その時は時期おくれ。相手の艦隊はしっかり防空態勢を、レーダーもいいし、防空態勢も完璧に固めてるし、そこにのこのこ鈍足で行ったってとっつけるものじゃないんですね。うんとおなかの大きい、よたよた歩いてるご婦人みたいなものですから、いかに守ったってとっつけるものじゃないですよ。

だからこの桜花を開発して19年に使った時期にはそういうことで惨敗を喫してますけど、それを17年に使えば有効だったと思うし、それからさらにこの桜花じゃいかんということになって、すぐ桜花二二型、四三型。二二型は銀河に積んで、炸薬量一・二〇〇を半分の六〇〇にして、非常に高速の銀河という飛行機に積んで、自分でも一二〇マイルぐらいザーッと海面を這っていってぶつかれる、それだとか、比叡山その他あちこちの山でカタパルトでジャンジャン一五〇マイル（二をかければキロになるから三〇〇キロ）行く、そういうところから撃ち出して、日本に襲来して来るアメリカの艦船にぶつかっていくオリンピック作戦が11月22日開発された。その頃使ったら、この二二型あるいは四三型はかなり有効だったと思うんですね。随分たくさんの向こうのの船を沈めたんじゃないかと思うけれども。

櫻花の戦果

ついでに「桜花の戦果は」と書いてあるから、念のためと思ってこれを皆さんに配りました。「神雷部隊桜花攻撃」。

この本に載ってる桜花が曲がりなり

にも戦果を挙げたというのはこれしかありません。

沖縄戦で米側が確認した損害は、艦船沈没三六隻（内、特攻で二六隻）、破損三六三隻（内、特攻で一六四隻）、航空機損害七百六十三機（内、英空母六八）とあった。やはりそれなりの損害だった。にもかかわらず桜花でたくさんの人員、機材を使って、戦果らしいものはこれしかない。

第三回と書いてあるが、第一回全滅、第二回も事故と、天候不良で全滅。第三回桜花攻撃。この表と照らし合わせてみればもっと正確に分かりますけど、4月12日に初めてこの日三機が桜花命中を報告。米側確認の突入桜花四機。これは「モリソン戦史」にもかなり詳しく書いてあります。駆逐艦マンナート・L・エーブルに命中沈没、駆逐艦スタンリーに命中小破、掃海艇ジェファースに命中小破、なお、命中、轟沈は、三浦少尉機の土肥中尉であると思われる。

4月14日、第四回桜花攻撃隊九機中事故で二機発進不能。七機未帰還。桜花隊真柄上飛曹以下七名、陸攻隊沢柳大尉以下四十八名戦死。「公刊戦史叢書」には桜花一機発進報ず」とあるが、米側との照合未了。これは発進してません。ちょうど私このとき、沢柳が私と同期なものだから、ずっと鹿屋で無線を聞いてました。沢柳がとうとう敵にたどり着けず全滅しましたけど、公刊叢書に「発進報ず」とあるけれども、米側に対する攻撃はしてません。しかし「戦史叢書」にはそう書いてあります。

菊水三号作戦。第五回桜花攻撃隊六機出撃。桜花隊宮下中尉以下五名、陸攻隊佐藤上飛曹以下二十八名戦死。宮下中尉の方から敵艦一隻を撃沈したと報告された。駆逐艦スピングルの沈没がそれと思われる。

菊水四号作戦。夕やみの沖縄泊地上空。山際兵曹の桜花は密雲を突き抜けて突進、雲下からの大噴煙により戦果が上がったと認められた。米側との照合未了。これは帰ってきた陸攻の操縦員からも聞いたけれども、戦果が上がったんじゃないかという気がするという。

菊水五号作戦。5月4日、この時が一番、大橋中尉たちが行ったんですが、大橋中尉以下六名、陸攻隊勝又少尉以下三十五名戦死。布告第一一〇号。米側確認損害。駆逐艦リューズ及びモリソンの二隻沈没、軽巡バーミングハム、駆逐艦イングラハム、敷設艦シェーの三隻損傷。この日の戦果は報告を上回っているが、いずれも桜花至近による。

菊水一〇号作戦。

沖縄泊地艦船攻撃のため、22日に攻撃をやって、桜花攻撃では各回とも戦闘詳報がなく、わずかに行動調書が残されているだけであるが、今回については戦闘経過概要があり、桜花隊片桐一飛曹搭乗と思われる陸攻稲ケ瀬機の最後が残されている。

「一式陸攻五二号　桜花機搭載笠原上空にて直掩戦闘機七機と合同、〇八二〇「敵戦闘機の追躡を受く」を打電。以後連絡なし。帰還せる戦闘機の報告によれば、敵巡三隻を発見、攻撃態勢を取りたるも、桜花発進せざるうちに、雲中より降下せるF―6F二機の銃撃を受け火災自爆。

なお、根本機の桜花発進を思わせる「ワレ突撃中」の意味なるトトトツー」を連送を同僚の田口中尉が鹿屋基地通信所でモニターしている。田口中尉はまだ生存してますがね、私と親しい。彼は間違いなく聞いたといいますが、米軍側には桜花関係のそういう戦果の記録はない。

桜花の戦果をこうやってみるとほんとに微々たるもので、たくさんの人間を使ってもったいないと思うぐらい戦果が上がりませんでした。

飯野　乗り越え乗り越えしてもなかなか戦果を上げ切れなかった。大変な出撃だけれども、私どもはみんな乗り越え乗り越え行ったわけですよね。

湯野川　こういうふうで、これはいかんと思ったら、うんと早く、4月、5月の頃からだけど、2月から二二型をどんどん開発して、二二型というのはスピードが速い銀河に積んで爆弾の量を二分の一に、一トン二〇〇の爆弾を六〇〇に減らして、しかも銀河の遠くで落として、サーッと海面を一二〇マイル這ってって相手を潰すというのは2月頃から開発して終戦の8月には実験できましたね。その段階の実験に成功している。

同じく7月にできた部隊、さっきちょっといったけれども、飛行機からやるんじゃなくて、カタパルトからバーンと発射する。比叡山その他、鹿屋の方から発射して、三百粁ぐらい飛んでってぶつかる桜花四三型、これなんかはかなり戦果が上がったんですね。

なんと、米側は、一九四五年6月に出た文書（「DAT」）見ると、そういうことを見通しを書いてるのね。やがて日本にはこういうものができるだろうと書いてる。やはりアメリカの方はよく研究してますよ。だけど桜花の一一型については戦果は全く不十分です。

田中　通信機は積んでないんですか。

湯野川　私たちは戦闘機も、建武隊、桜花隊の戦闘機も全部通信機を積んで

ました。陸攻はもちろんです。

田中　桜花にも。

湯野川　いや、それはありません。桜花の戦果は陸攻が確認しますから。桜花はそんなもの一切ありません。ただ突っ込んでぶつかるだけです。

さっき戦果のところを読みましたけど、刻々報告を符号で打ってくるものですから、大体の戦果は陸上で部隊で捕まえてましたけど、アメリカ側の認めた戦果とほぼ一致してます。一部照合未了というのがありますけど、ほぼ一致してます。

久我　零戦での特攻に比して桜花の特攻はどういった点が違うんですか。

湯野川　まず桜花を運ぶ陸攻隊が必要で陸攻隊がやられてからすぐ桜花隊で零戦特攻を編成して戦った。それはものすごく戦果を上げて、突っ込んだ四機が四機全部戦果を上げた。七五％、四機の内三機が戦果上げたのもあるし、ごくまれに四機の内二機しか上げないのもあったが、到達率はこれにみんな書いてありますから。そっちの方はものすごく戦果が上がる。これは昔からやってる自分で操縦してね、レーダーに捕まらないように海面をスーッと随分近間まで行って、そこで敵のそばで上に上がって目標に突っ込みますからね、成功率がすごく高いわけですね。だからこれだけの戦果が上がってる。

久田　でも、その戦果に比して桜花が少ないということは。

湯野川　突入迄に母機がやられ、桜花も一緒で上げられない。

久田　でも続けられた要因というか、そこにかけられた思いというのはどういうものがあったんですか。

湯野川　次の二二型とか四三型につながっていくこともありましたけど、やはりそういう思うような効果が上がらなくても、陸攻と桜花があれば、それで出れれば桜花に行きたがった人が多いんですよ。一番最初生き残り投入しながら残り全部私のところに百三十一名集めて、とてもこれでは戦えないと。零戦の五二型に切り替えて「それを希望するもの手を上げろ」といったら五名ぐらいしか手を上げなかったね。それからまた詳しく話して「どうだ、この戦闘機で行きたいか」、ほとんど全員が賛成してくれる。それでも四、五名の人は、「まだ私は桜花で行きたい」。だから桜花に対する愛着もかなり持ってた搭乗員が多かったですね。

牟田　戦果の情報は大体入ってきていたということですか。

湯野川　「我敵戦闘機発見」「敵戦闘機追ショウ」といったら大体ぶつかってますな。「我敵発見、今より突撃する」という報告を受ける。ツツツツツー。止まったときはぶつかったときだろうと。ほぼそういうのは戦果が上がってる。

牟田　桜花がどれくらい戦果を上げているかという情報は入っていたわけですか。

湯野川　入ってない。こっちがさっきの4月28日の山際みたいに、4月14日みたいに桜花の発進報は伝わるが、米側との照合未了という。山際の場合は戦果。沢柳部隊の場合は、戦果が上がっているという確信が私にはあったけれども、帰ってきた陸攻の搭乗員から聞いても、これはやったなと思いました。

牟田　湯野川様ご自身は最後まで桜花で行きたいということを思われていたんですか。

湯野川　私はどっちでもよかったけどね。一番最初「行け」といわれたのは桜花でした。昭和19年の12月23日の朝、レイテの戦艦スパが見えると。出ていったときはもちろん桜花です。そのときは覚悟してました。

3月18日、命令がきて「出撃せよ」と。それも桜花でした。戦闘に出る間際に機動部隊の攻撃で、陸攻隊は皆焼けちゃって出られなくて。

4月12日に私が出撃したときは、零戦全員つれて、鹿屋を飛び立った。そのときは零戦で行きました。

だからどっちでもよかったですね。「行け」といわれれば。

（編者）紙面の都合で丁度半分のところで区切り、あとは次号に

巻末　附記

桜花概要

桜花はロケット推進の有翼爆弾を操縦して、敵艦に激突するものである。一式陸攻を母機とし、四〇〇〇メートルの高度から発進するもので、19年8月16日空技廠で設計に着手、9月初旬一号機を完成した。その性能は次のようである。

乗員一名　機幅五・〇米　機長六・〇六米　機高一・一六米　翼面積六平方米　全備重量二・一四〇キロ　航続距離二〇海里　弾量一・二〇〇キロ　滑空速度二五〇節　噴進時速度三五〇節

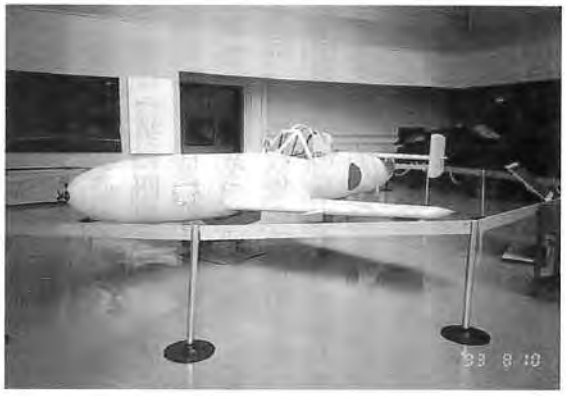
桜花一一型三〇機を積んだ空母雲龍が、12月19日宮古島沖で敵潜水艦によって撃沈され、比島作戦には使用できなかった。

20年3月21日敵機動部隊追撃のため桜花に攻撃の命が下った。桜花の諸元は前述の通りだが、問題は桜花を積んだときの陸攻の速度である。二、二〇〇キロの小型機を機外にけん吊しているので速度はかなり低下する。当時敵のレーダーには二〇〇キロ米で確実に補足され、敵戦闘機の集中攻撃を受けることになる。桜花の発進距離三〇キロまで、戦闘機の護衛が絶対必要である。

この日神雷部隊は一式陸攻一八機（うち桜花一五）で野中五郎少佐が陣頭に立ち、鹿屋を飛び立った。援護戦闘機は三〇機にすぎない。敵艦との距離一〇〇キロと思はれるころ、グラマン約五〇機の要撃をうけた。わが戦闘機の防戦もむなしく、ついに陸攻が攻撃を受けるようになった。桜花の搭乗員はまだ移乗していない。応戦したが全機撃墜されてしまった。第一回の神雷部隊は、雄図空しく消えてしまった。

桜花隊三橋大尉以下一五名、攻撃隊野中少佐以下一三五名、戦闘隊一〇名が帰らぬ人となった。

この後神雷部隊は九回出撃しているが、細部は口述する。



桜花の模型（靖国神社）

待望のホームページ いよいよ開設

かねてより理事会、評議員会で検討され、承認が得られていたホームページがいよいよ本年七月十六日から開設する運びとなった。

開設までには栗原事務局次長を中心に、多くの方々（神崎美恵子氏、居森達治氏、福島勇氏、久次目徹志氏等、会員内外）の協力が得られたことは幸いであった。

中でも居森氏は自ら「神風」と名付けたホームページを開き、全世界に向けて発信、多数のアクセスを受けているとのことである。

同氏によれば国内はもとより、米国等から多数寄せられ、年令も10代を始め50、60代の人々から巾広く寄せられているとのことである。時には首をひねるようなデータもあるが左程多くないとの由。

当協会は財団法人として活動しているのであるから、法律的には理事によって運営されれば良いとされているが、やはり次代を育て、引き継いでもらうことが強く望まれる。それにはこのホームページは有力な手段と言えよう。

これによって、若き志ある人々が得られればまことに幸いである。

我々会員も平均年令が70歳半ばを超えているので、ここ5年くらいの間に目途をつけなくてはなるまい。それ故にこそホームページは必要不可欠の手段なのである。（事務局長　木村記）

知覧で出撃を待つ第72振武隊の少年達

ホームページアドレス
http://www.tokkotai.or.jp/

比島慰霊行に参加できなかった者の弁
「レイテ作戦の記録」より

田中　賢一

戦争中私はこの方面に行ったことはない。しかし第二挺進団（高千穂降下部隊）で多くの知己を失ったので、この慰霊行には参加したい、というよりも参加しなければ申訳ないという気持だったが、健康之を許さないので見送ってしまった。

実は私はこの方面には戦後二回行った。そして「高千穂降下部隊」、「レイテ作戦の記録」という二冊の本を江湖に問うた。どちらも出版社は原書房だが、既に絶版になってしまった。

ここに後者の方の本の末尾の一節を転載して、慰霊の気持を捧げることに致し度い。

レイテの海

レイテ作戦の本質を、一言もって表現すれば海洋遭遇戦だった。

「アイ　シャル　リターン」と宣言し、コレヒドールから逃げ去ったマッカーサーが、夢寐にも忘れられないのは、フィリピン奪還であり、最終目標がルソン島であることは言うまでもない。

ルソン島上陸のためには、まずその肢翼をもがねばならぬ。彼が第一に選んだのはレイテ島だった。

レイテ島には、日本軍の作った六個の飛行場があり、しかも太平洋に向って、レイテ湾という絶好の上陸地点が開けている。日本軍の警備兵力は一個師団である。

マッカーサーは、隷下の第六軍をして、レイテ戡定作戦を行わせ、自らこれと同行した。第一次上陸部隊は、四個師団、十七万四千名で、アドミラルティとホーランジャから発進し、十月二十日に上陸した。

これに対し、我が方が台湾沖航空戦の戦果を過信し、地上決戦を企図したことはたびたび述べた。

米軍は一挙に四個師団を上陸させ、そのとき使用した船舶（軍艦を除く）が五一八隻もあった。これに対し、我が方が一回に数隻の輸送船を使い、一個師団足らずの兵力を送り込んでいたのでは、勝てないのは当然だが、それは結果を知ってからの話で、当時は勝機をつかみ得ると信じていた。

敵の第一次上陸兵力を二個師団とみていた。これは、ホーランジアからの船団だけを、十九日に発見していたためだが、二十四、五日頃もう二個師団は来るだろうと判断していた。我が後方はマニラ、敵の後方はホーランジアとした場合、距離的にみて敵は四倍の遠方から繰り出して来なければならない。

我が方が四個師団も注ぎ込めば、優に敵を追い落とし得るとみた。

陸上兵力だけの問題ではない。フィリピン群島各地の飛行場に展開している我が航空は、母艦に頼る敵航空に、十分に対抗できると考えていた。

我が大本営は、レイテ島を焦点とする遭遇戦に、成算を持って踏み切り、小磯首相は「レイテは天王山」、「勝利は我が頭上に在り」と叫び国民を鼓舞した。

すでに戦いの経過を述べてしまった後だが、遭遇戦という見地から、彼我の投入した兵力を、仮に人数だけでつかんでみると、初めレイテにいた日本の兵数は約二万六千。その後増援した兵力は約五万、それ以外に途中で海没した者が三万ぐらいあろうか。

一方、米軍は初めの上陸兵数が十七万四千。その後増援した兵数が約八万。

これだけの兵数が、海を渡って日本の一県ほどの島に駆けつけて戦ったのだから、世界戦史上類のない海洋遭遇戦と言えよう。

強いて前例を求めれば、ガダルカナルがそうだった。あのときは、我が後方はラバウルで、今回の場合にくらべ倍も遠かった。

それはさておき、今度の場合投入した兵数だけをみても、日本軍が地上戦闘で敗れるのは当然だが、実は、これだけの兵力しか投入できなかったこと、即ち海上輸送で敗れたというのがレイテ作戦の実態だった。海上輸送さえ確保できれば、ルソン島にはまだ数個師団の手持兵力があり、現にそれをレイテに注ぎ込もうとする計画は立てられていた。

そこで、レイテ作戦の一番の立役者、船舶部隊と輸送船について振り返ってみたい。このことを詳細に調べて取りまとめれば、それだけで一冊の書物になろう。しかし、ここではその資料の持ち合せもないし、概説にとどめざるを得ない。

レイテの海で死んだ船舶部隊の将兵と輸送船の船員、並びに陸上の戦闘にまき込まれて玉砕したこれらの人達の、その人数さえさだかにつかみ得ないが、このことに触れずしてレイテ作戦を語ることはできない。

レイテへの海上輸送には、陸海軍協

力して行ったものと、陸軍単独のものとがある。陸海軍協力のものを「多号」と名付け、これには一次から九次までである。

第一次は、ミンダナオ島のカガヤンから、歩兵第四十一聯隊を海軍艦艇でオルモックに上陸させたもので、これは成功した。

第二次は、第一師団主力の輸送で、高速輸送船四隻（金華丸、香椎丸、高津丸、能登丸）を使い、十一月一日晩オルモックに揚陸。これが成功したことはすでに述べた通りだが、そのうち一隻（能登丸）は、翌二日、弾薬を揚陸中に空襲を受け沈没してしまう。

第三次は、低速輸送船五隻（せれべす丸、泰山丸、天昭丸、西豊丸、三笠丸）で、主として軍需品を積んで九日マニラを出港するが、これは途中で全部撃沈されてしまう。

第四次は、第二次に使った高速輸送船三隻で第二十六師団を運ぶが、これが十日イピルに上陸中撃沈され、第二十六師団が重装備一切を失ったことは、既述の通りである。但し一隻（金華丸）だけは辛うじてマニラに帰着する。

その後二週間ばかり海上輸送はと絶え、第二十六師団は、重装備を欠いたままダムラン附近で苦戦する。

第五次輸送は、二十三日と二十四日、海軍輸送艦数隻が、軍需品を積んでマニラを発つが、一隻も行き着いていない。第四次輸送で一隻だけ残っていた金華丸も、十四日マニラ湾で空襲に遭って沈む。海上輸送からみれば、第二十六師団を運んだ第四次多号で、敗北は決定したものと言えよう。

第五次が失敗した後、陸軍の潜水輸送艇が初めて実戦に参加し、三隻のうち二隻が二十七日オルモック湾に到着し、糧食の揚陸に成功する。潜水輸送艇の搭載量は、わずか四十トンに過ぎないので、二隻や三隻では何ほどの足しにもならないが、十七日振りに船が着いたということで、関係者を感激させた。

次の第六次輸送は、神悦丸と神祥丸の二隻で、これは、奇跡的に成功し、二十八日夜軍需品を揚陸することができた。

第七次輸送も主体は軍需品だったが、陸軍のSB艇と海軍の輸送艦や駆逐艦計十一隻を用い、十二月一日から四日までの間に、二隻を除いてイピルに到着することができた。SB艇とは七～八百トンの貨物船を改造した上陸用舟艇である。

第八次は第六十八旅団の輸送、第九次は、高階支隊、カモテス支隊及び海軍陸戦隊の輸送である。これらについては、すでにそれぞれの章で述べた通りだが、第六十八旅団は赤城丸、白馬丸、日洋丸、第五真盛丸の四隻と輸送艦に分乗して出発するが、七日、オルモック湾に入れず、サンイシドロに擱坐上陸する。この日、イピルに敵一個師団が上陸したことも、すでに述べた。

最後の第九次輸送は、オルモック附近が戦闘の渦中で、海軍陸戦隊を載せた輸送艦だけは、十一日夜、オルモック西方に接岸、上陸を強行したが、三隻の輸送船は、バロンボンに向う。内二隻（美濃丸、たすまにあ丸）は空襲によって火災を起こし、人員は救助されたが船は放棄する。空知丸だけがバロンボンに擱坐上陸した。

これをもって、多号と呼ぶ一連の海上輸送作戦は終了を告げるが、これ以外に陸軍だけで行った機帆船や海上トラックによる輸送がある。これらも、方面軍の部署としてマニラから発進したものと、第三十五軍が、手持の兵力を運ぶため、独自に行ったものとがある。

機帆船とは百トン前後の木造船で、海トラとは千トン未満の鉄船である。もちろん民間徴用のものである。昼は島蔭に隠れ、夜間だけ航行した。マニラから発進した第二十六師団の部隊の如きは、順調にいっても、機帆船は七日、海トラは四日もかかった。原始的な輸送法だった。当時蟻輸送という言葉も使われている。

第二十六師団は、三個大隊をこの方法で運んだが、惨憺たる結果に終ったことはすでに述べた。

レイテ決戦が、日米両軍の遭遇戦だと言ったが、片方がハイウエイを自動車を連ね、戦場に駆けつけるのに対し、片方は草鞋ばきで、ぬかるみに足を取られながら戦場に向うようなもので、初めから話にならない。

米軍の資料によれば、レイテに向う海上で日本軍に与えた損害は三万というが、これは沈めた船のトン数から推定したものであろう。

沈められても護衛艦に救助されたり、近くの島に漂着した者もあるので、三万という数字よりは少ないだろうが、多くの将兵と船員が水漬く屍となったことは、忘れてはならぬ。

この輸送作戦で、海軍も多くの人命を失っているが、海軍のことまで記述を及ぼし難いので、ここでは陸軍の船舶部隊についてだけ述べよう。

陸軍船舶部隊は、もともと、上陸作戦時大型輸送船から海岸までの輸送を担当する部隊だった。ところが、太平洋地域に戦場が広がるに及び、必要に

迫られ、近距離の海上輸送からその護衛のことまで自ら実施するようになり、次々と新しい部隊を作っていった。最後には、体当りによる艦船攻撃まで実施するようになったが、レイテ作戦のときは、その部隊はまだ登場していない。

とにかく、急速に拡充したため、部隊の編制や能力についても不明の点が多い。

この作戦に、レイテやセブを根拠にして活躍した部隊のことは、後から述べることとし、マニラやビサヤ地区の他の島々からの輸送に任じた部隊について、その部隊名だけでも紹介しておきたい。(松原茂生述「大東亜戦争における陸軍船舶史」に拠る)

海上輸送第八大隊、同第九大隊、第二機動輸送隊本部、機動輸送第三中隊、同第四中隊、同第五中隊、同第八中隊、同第九中隊、同第十五中隊、潜水輸送派遣隊、海上駆逐第一大隊第二中隊、船舶通信聯隊第一、二、三、四の各中隊、船舶砲兵第二聯隊、第五野戦船舶廠セブ支部

以上列挙した各部隊のうち、海上輸送大隊や機動輸送中隊は、レイテに向う船舶輸送を担当し、ほとんど海没した。生き残った者は方々の島で地上戦闘に参加したものと思うが、実態はつかみ難い。

海上駆逐大隊というのは、敵潜水艦や魚雷艇に対し、我が船舶の護衛に任ずる部隊で、一個中隊が、レイテ輸送作戦に参加した。空襲によって逐次に損耗していった。

船舶砲兵聯隊や船舶通信聯隊は、各輸送船に分乗していたが、海没によって大部の者は戦死したのであろう。

次に、レイテ島に配置されていた船舶部隊は次の通りである。

第三船舶輸送司令部セブ支部の一部、船舶工兵第二十一聯隊、船舶工兵第一野戦補充隊の一部、船舶砲兵第二聯隊第六第七中隊、船舶通信聯隊の一部、第十五揚陸隊の一部、海上輸送第八大隊の主力。

フィリピン方面の船舶作戦全般は、第三船舶輸送司令官が指揮し、司令部(三船司と略称)はマニラにあった。レイテに配置された前項の船舶部隊は、三船司セブ支部長の指揮下に入れられ、支部長光井大佐は、オルモックに指揮所を推進した。

光井部隊の総人員は約二五〇〇人ほどで、その任務は揚陸作業とカモテス海の局地輸送とされていた。

オルモックには桟橋があったが、大型船は接岸できない。第一師団を載せた多号第二次の船団が入港したときは、船舶工兵第二十一聯隊が大発四十隻を積んで同行しており、船舶工兵第一野戦補充隊も港内で待機していた。

十一月一日夕刻入港、揚陸は一晩では終らない。翌二日、天明と共に敵のP―38が現れ、我が戦闘機と空中戦を演じ、船舶高射砲もここを先途と射ち上げるが、敵機は午後まで連続飛来して銃撃を加える。船舶兵は煙幕を展張し、懸命に揚陸を続けたが、一四三〇頃、モロタイ島からB―24二四機が飛来し、遂に能登丸が被弾して沈没した。第一師団はこれによって十五榴弾薬多数を失う。

夕方までに他の三隻は揚陸を完了した。第一師団としては、軍需品に一部の損害はあったものの、上陸は成功だった。

十一月九日、第二十六師団を載せた多号第四次の船団が到着するが、すでにオルモック桟橋は使えない。五日以降例のハロから射ち出す長射程砲の砲撃にさらされていたからである。

やむなくイピル海岸に上陸し、大打撃を受けたことはすでに述べた。

第一師団を揚陸したとき、光井部隊は大発八十七隻を持っていた。そのうち二十七隻を第百二師団輸送のためネグロス島に派遣し、五十余隻を多号第三次と第四次揚陸のため控置していた。

空襲から守るため陸上に引き揚げ、椰子林の中に隠しておいたところ、八日に台風が来て、波浪が海岸の砂をまき上げ、大発が埋没してしまった。第二十六師団の船団が到着したとき、直ちに使える大発は、わずか五隻に過ぎなかった。

このように光井部隊は、揚陸作業に悪戦苦闘するかたわら、機帆船が海没して各所に漂着している人員の、収集輸送に活躍する。その間、空襲を受け人員、舟艇ともに減少していった。

十一月下旬、第二十六師団がダムラン方向に転進、次いでブラウエン作戦のため脊梁山脈に入るのだが、この頃、オルモック附近に軍の予備兵力は一兵もなく、光井部隊の二千余が、唯一の予備隊といった恰好になってしまう。

十一月中旬頃から、カモテス海に敵魚雷艇が姿をみせ、その活動が追々活発になってきた。十一月二十七日と二十九日には、敵駆逐艦が現れ、ダムラン北側の我が斉藤支隊に艦砲射撃を加えるに至る。

第三十五軍では、敵が我が背後に向けさらに積極的な作戦を行うのではないか、ということは予測していたが、多号第八次の第六十八旅団が到着する

まで、手持の予備隊は皆無だった。やむなく光井部隊をオルモック防衛隊として、地上戦闘任務を付与し、薄氷を踏む思いで、ブラウエン進攻作戦に踏み切ったのである。

そのとき、敵一個師団がイピルに上陸して来たことは、オルモック（2）の章で述べた。

オルモック防衛隊は、その矢面に立たされ、約十日間の激闘の後、力尽きて玉砕する。

七日朝、敵が上陸して来たとき、オルモック防衛隊長光井大佐の率いる兵力は、約二〇〇〇名で、野砲二門、高射砲十三門、機関砲四十四門を持っていたが、歩兵はいなかった。

結局、歩兵の役割を果したのが、船舶工兵ということになる。

防衛隊の配備は次のようになっていた。

イピル東方台上に、船舶工兵第二十一聯隊長浜園少佐指揮のイピル地区隊を、オルモック西方に、第十五揚陸隊長指揮の遊撃隊を配置し、イピル周辺には、野戦高射砲第七十六大隊長指揮の防空隊が陣地占領していた。これは多号第八次、第九次を受け入れるための配置だったと思う。オルモック西方に一部を置いたのは、潮流の関係でイピルに上陸しようとしても、オルモック西方まで流されることがあるためだろう。現に第二十六師団が上陸したときも、そのようなことがあった。

敵一個師団が上陸しているとき、これと並ぶようにして、新郷聯隊林大隊の一個中隊と機関銃中隊が、上陸して来たことは既に述べた。

この追及部隊が、光井大佐の指揮下に入り、オルモック防衛隊における唯一の歩兵部隊となる。

地上戦闘について、我が方の詳しい記録は残っていない。米軍資料によれば、到るところで日本軍の頑強な抵抗に遭い、苦しい戦闘を繰り返したことが縷々述べられている。

オルモックとイピルの中間の台上に、キャンプドーンズと呼ぶ兵営があった。——この兵営には、現在もフィリピン軍が駐とんしていることは、オルモック（2）の章で述べた。——イピル地区隊の主力はここを中核にして戦ったらしい。

米軍は八日朝から一個連隊を第一線に出し、国道沿いに攻撃を始める。目標はキャンプドーンズである。砲兵二個大隊がこれを支援し、水陸両用の戦車大隊も、海上を迂回して攻撃に参加し、航空攻撃も加えたが、その日はキャンプドーンズの西南方一キロ位のところまでで日没となる。

平地は、今もそうだが一面の水田で、その泥濘が攻撃側を苦しめる。

翌九日、攻撃を再興する。支援砲兵はさらに一個大隊増加し、また歩兵のもう一個連隊が、東の方に迂回して台上から攻撃し、日没頃やっとキャンプドーンズを占領する。

十日、米軍はオルモックの町を攻撃するが、すでに砲爆撃で廃墟と化している市街地に、日本の狙撃兵が潜んでいて、英雄的に、だが絶望的に戦った、と彼等は述べている。

十日の夕方、オルモックは米軍の有となる。

オルモック（2）の章で述べた通り、今堀支隊の上條大隊だけは、八日、オルモック南方に突出し、敵と遭遇戦を演ずる。また高千穂部隊の一個中隊も、同じ日の午後、オルモック東方の台上で一部の敵と戦闘するが、十日までの間の戦闘で主役を演じたのはオルモック防衛隊だった。

一個師団の米軍が、上陸地点からわずか六キロしか離れていないオルモックの町を、占領するのに三日もかかっている。この一事だけで、船舶工兵を主体とするオルモック防衛隊が、如何によく戦ったか証明することができるであろう。

オルモックが占領された後、防衛隊は、今堀支隊に連繋してオルモック東方の台地に陣地を占領したようになっているが、ほとんど戦力は尽きていたであろう。詳しいことはわからない。

以上概要ながら、レイテに散った陸軍船舶諸隊の鎮魂譜とするが、ここで忘れてならないことは、輸送船乗組みの船員である。

今次大戦中、船員の死亡率は四十三%に及び、軍人の死亡率の約二倍であると言われている。

レイテ作戦中、フィリピン周辺で沈んだ陸軍の徴用船は、二十四隻十三万トンという資料もある。これは皆千トン以上の船で、機帆船などは含んでいない。一個師団運ぶのに約二万トン必要だったから、十三万トンという数字は大きい。

死んだ船員の数は明らかでない。

フィリピン人の神話では、群島の誕生を次のように伝えている。

——はじめは空と海しかなく、一羽の大きな鳥がその間を飛びまわっていた。

その大きな鳥は果しない飛翔に疲れ果て、休息の場所を探しても見付からない。そこで空の神と海の神がけんかをするように仕向けた。

海の神は怒って海水を吹き上げ、空

の神はその仕返しに岩塊を投げ落した。

この争いの結果、島々ができ、鳥は翼を休めることができた。そして緑の木や草が岩から芽を吹き出した。――

この神話のような激しい戦の末、フィリピン人の翼を休めている島々には〝東の海に真珠〟（フィリピン観光のキャッチフレーズ）と讃えるにふさわしい平和が訪れた。

慰霊団は、夕暮れのオルモックの海岸に塔婆を建て、読経、焼香のささやかな供養をした。

折しも、カモテス海の残光を浴び、セブからの定期船が入って来た。

〝フィリピンの海で死んだ人々のために〟

慰霊団長は呟くように言って焼香する。

レイテの空

前章でレイテ作戦は海上輸送の戦いだったと言った。その海上輸送の戦いに敗れたのは、空の戦いに敗れたからだった。

レイテの空と標題を掲げて、空の戦いのことに触れてみたいと思うが、この標題は適切でないかも知れぬ。航空作戦をとり上げる場合に、レイテ島附近の空域だけに限って述べることはできない。そこで正確に言うならば、レイテ作戦間の比島方面航空作戦ということになろう。

しかし、こんな大きな標題を掲げてしまっては、この書物の主題から外れてしまう。

今までに、レイテで戦った全地上部隊と、レイテに向う途中で海の藻屑と消えた部隊の人達のことに、遍ねく触れてきた。そこで、この南瞑の空で死んだ将兵のことについても、何か述べなければ申訳ないという気持が生じ、慰霊の意を込めて少し申し述べておきたい。

航空作戦の大原則は、まず航空優勢を獲得することにある。航空優勢獲得ということは、単に作戦上の問題だけでなく、国家の軍需産業や要員養成のことまで、密接不離の関係を持っているが、ここでは、もちろんそんなことまで言及しようとは思わぬ。作戦上のことだけに限って眺めてみよう。

航空優勢獲得のためには、対航空戦で敵を圧倒しなければならぬ。これがまた大原則で、敵は着実にこの原則に従って戦いを進めてきた。

フィリピンの各飛行場が、敵艦載機に初めて攻撃されたのは、九月九日である。このときは、二十四日までほとんど連日のように空襲を受け、陸海軍の航空が大打撃を受ける。

この間に敵はモロタイ島に上陸し、同地の飛行場を整備した。レイテ作戦のとき、モロタイ基地の敵爆撃機が、猛威を逞しくする。

次に敵機動部隊が接近したのは、十月十日からだった。沖縄、台湾、フィリピンと各飛行場に猛攻を加え、やがて二十日のレイテ上陸となるのだが、その間、十二日から十五日まで我が海軍航空部隊は、敵機動部隊に反覆攻撃を加え、大戦果を収めたと報告した。いわゆる台湾沖航空戦である。

この戦果を過大視して、レイテ決戦に踏み出したことはすでにたびたび述べた。

敵がレイテに上陸したとき、我が陸海軍の航空は、それまでの戦闘で戦力消耗し、直ちに総攻撃をかける力を持っていなかった。そこで、数日間準備を整え、二十四日から陸海軍航空を挙げて総攻撃を行う。

海軍航空は敵機動部隊を、陸軍航空はレイテ湾に群がる敵艦船を目標とした。レイテ湾の艦船攻撃でも、必然的に敵航空を相手とする空中戦は惹起するが、積極的な対航空戦という役割、即ち敵機動部隊の攻撃を担当したのは、海軍航空である。航空優勢獲得という原則に照せば、機動部隊攻撃を最優先にすべきだが、レイテ湾に群る艦船を叩くのが、焦眉の急であるし、また、陸軍航空は洋上航法に不慣れで、機動部隊の攻撃が無理だった。

二十五日、初めて海軍の神風特攻隊が、空母目がけて突入する。

特攻隊ならずとも、全搭乗員が敵艦船目がけて必殺の攻撃をかけ、一時は戦勢を押し切るかに見えた。

二十五日、栗田艦隊がレイテ湾突入を企てるが、途中で反転する。このことは、レイテ作戦を語る場合の山場になるが、本書は陸軍主体に述べているので割愛する。

航空総攻撃は連日繰り返され、米軍にとっても際どい戦いだった。戦勢の鍵を握るのは、我が基地航空と敵機動部隊との決闘ということになる。陸上基地は不沈空母と言われてはいたが、相手は変幻自在に移動し、我が攻撃をかわすことができる。それに、初めから兵力に大差があった。

二十四日、総攻撃開始の日、我が海軍の基地航空部隊の実動機数は約四〇〇機。これに対し敵航空は、機動部隊空母十七隻約一一〇〇機特設空母十八隻約四〇〇機、計三十五隻一五〇〇機をようしていた。

我が大本営では、敵兵力を空母十六隻約一〇〇〇機と判断し基地航空で叩ける相手とみていた。敵は二十六日頃からタクロバンとドラグ飛行場の使用を始め、また三十日には、モロタイ基地のB―24大型爆撃機が、大挙来襲し、相手は艦載機だけでなくなる。

特に航空戦力の平衡を崩す発端となったのは、三十日、我がバゴロド基地に対するB―24の初空襲だった。B―24は、四発の戦略爆撃機だったが、敵は、モロタイの基地を整備し、この巨大な爆撃機を戦術爆撃に使い始めたのである。

我が方の重爆は、最大搭載量一トンしかないのに、B―24のそれは七トンにも及び、十三ミリ機関銃十一挺で、針ねずみのように武装していて、我が戦闘機ではなかなか撃墜できない。

翌々十一月一日は、すでに述べた通り、第一師団を載せた輸送船団が、無事オルモックに入港するが、翌日、揚陸作業も終りに近づいたとき、来襲したB―24のため、高速輸送船能登丸が撃沈される。

多号輸送作戦初めての損害だったが、このことはレイテ作戦の前途に、暗い翳（かげ）を投げかける。

ネグロス島の飛行場は、バゴロド航空基地と総称するが、大小合せて七個の飛行場があり、我が航空の第一線はここにあった。

十月三十日から、ほとんど連日のように、バゴロド基地にB―24が来襲し、我が方の損害は逐次増加してゆく。

モロタイの敵基地制圧は、この地区担当の第二方面軍が、斬り込み攻撃を続けていたが、すでに力尽き、第四航空軍では、後にレイテに使った薫空挺隊を、モロタイに使うことも、一時考えていた。また爆撃部隊の一部を割いて、モロタイ爆撃を実施はしたが、我が戦闘機の行動半径を越えるため、夜間爆撃しかできず、敵の活動を封ずるには程遠いものだった。

このように、モロタイ基地の敵に対しては、点滴的な攻撃だったが、レイテの飛行場に対しては、この頃連日有効な攻撃を加え、相当の成果を収めることができた。

敵は、十月末本作戦の大勢決したとみて、ハルゼーの率いる機動部隊を引き揚げた。マッカーサーが感謝電を送ったことはすでに述べた。ところが、多号第二次、即ち第一師団や今堀支隊の上陸を知るに及び、再度機動部隊をこの戦場に繰り出したのである。

十一月五日、ルソン方面は早朝から、艦載機数百機の攻撃を受ける。海軍特攻機が敵空母に突入するが、我が方は多くの損害を被る。六日、再び延数百機が来襲し、我が陸海の航空は、完全に慴伏させられ、その結果が十一日の多号第三次船団全滅につながる。

十一月四日頃までは、どうやら鍔競り合いのような恰好に見えたが、敵機動部隊が再度現出してからは、坂道を転がり落ちるように均衡が崩れていった。人員、器材の補充や、飛行部隊の増援はあるものの、損耗はそれを遙かに上廻り、その結果は輸送船の撃沈となって、本作戦の前途に重くのしかかってきた。

台湾沖航空戦の幻の戦果に眩惑されて踏み出したレイテ決戦を、如何に収拾するか。第十四方面軍では、レイテ決戦打切りを考え、十一月五日頃から、たびたび南方総軍に意見を具申するが、総司令官は大本営の意を体し、十日、断乎決戦続行を命ずる。その二日前に、東京では小磯首相が「レイテは天王山」と国民に向って獅子吼する。

近代戦の戦理から言っても、現実に展開している事象から見ても、作戦の行手を双肩に担っているものは航空だった。

結局、陸海軍航空が、その活路を特攻に求めようとしたのは、むしろ自然の成り行きだった。但し、そこにはそのような戦法を正式に採り上げることに、当時の若者が応えられたということが前提になっている。

体当り攻撃を、自発的に決行した事例は、それまでにも数件ある。しかし、地上にいる指揮官が命令してやらせたというのは、このときが初めてである。

特攻隊員は志願か命令かとは、戦後よく論評されるところであるが、それは特攻隊を編成するときの話であって、出撃するときは総て命令によっている。

最初に特攻隊を使ったのは、海軍である。十月二十五日、神風特別攻撃隊が、敵空母に突入して大戦果を挙げたことは前にも述べた。これは、第一航空艦隊司令長官大西中将が、自らの責任で編成したものであって、大西中将は、これ以外に手持の兵力で敵機動部隊を叩く方法はないと信じ、捷一号発動の翌日、即ち、敵上陸前日の十九日に、二十四機より成る第一神風特別攻撃隊を編成した。

海軍航空は、この後も手持の兵力で特攻隊を編成してゆくが、陸軍の方は、これと趣を異にし、内地で編成して戦場に送り出している。海軍の第一航空艦隊と同じ頃、万朶隊を鉾田飛行学校で、富嶽隊を浜松飛行学校で編成し、現地の第四航空軍に編入する。

その後、内地の飛行学校や飛行師団で、十二隊を編成し、続々戦場に進出

させた。

先発の海軍神風特攻隊は、十一月中旬までに一一四機が突入し、米軍の資料によれば撃沈は空母一、駆逐艦一に過ぎないが、損傷を受けたものは、空母十、巡洋艦一、駆逐艦三となっている。これをみると、海軍特攻機が空母目がけて、如何に殺到したかがうかがえる。また別の資料（米軍）によれば、十一月末までの間に、空母の損傷十六隻となっている。

陸軍特攻隊の第一陣が、ルソン島に進出したのは十一月初めで、十二日に万朶隊の三機が初めて敵艦船に突入している。

海軍が敵機動部隊を主目標にしたのに対し、陸軍は主として輸送船の攻撃を担当した。比島方面航空戦全期間に、二〇二機二五一名が突入しているが、その戦果は明確でない。

米軍の資料にも、輸送船は米海軍の艦船ではないので、正確な数字が挙っていないが、空母よりも損害が多かったことは、当然であろう。当時の我が方の記録が、戦果を過大に挙げていると、よく言われるが、掩護の戦闘機が敵機と渡り合いながら視察し、しかも、完全に沈むまで見ていることができないので、やむを得ないことだった。

万朶隊の三機が、敵艦船に突入したときの景況を、掩護戦闘隊の搭乗者は次のように報告している。万朶隊の機種は九九双軽だった。

――サマール島東方からレイテ湾に進入すると、〇八三〇（十一月十二日）レイテ湾に向う大中型輸送船と護衛艦艇群を発見した。田中逸夫曹長（生田留夫曹長同乗通信担当）は、翼を振って合図すると急反転降下、高度五千メートルから、直掩機も追随しきれない猛烈な急降下で突進した。久保昌昭軍曹、佐々木友治伍長の二機もこれに続く。

特攻機突入の後には、もうもうたる黒煙を噴いて炎上し、沈没寸前の大型艦船二隻と、炎上中の小型船一隻を確認した。

直掩隊は、P―38と交戦したが、独立飛行第二十四中隊渡辺史郎伍長は、被弾したのであろう、特攻機の命中した目標に自らも体当りした。――

これは、当時の新聞記事から引用したものだが、壮烈な突入振りが目に浮ぶ。

なお、万朶隊の全将校は、それより七日前、マニラの近くで敵艦載機と交戦して撃墜され、戦死している。田中逸夫曹長機は、戦死した岩本大尉らの遺骨を載せて出撃したという。

一方、米軍側のみた特攻機の模様を、モリソンの海戦史から引用してみよう。十二月七日、オルモック湾での出来事である。

――駆逐艦「マハン」は、三〇〇〇ヤードの距離から双発機の編隊に対空砲火を開いたが、うち二機は、直ちに一五〇〇ヤードの間隔で突っ込んできた。第一機は間もなく空中で爆発し、焔のかたまりとなって、「マハン」から五〇ヤード離れた海面に落ちた。第二機は艦を飛び越えた。第三機、第四機は、安全な距離で高射機関銃で撃墜したが、第五機が「マハン」に激突した。第六機は吃水線に突き刺さった。ほとんど同時に、第二機が引返して来て、前甲板と吃水線の間に激突した。第七機は、既にP―38との戦で火を吹いていて、艦を目指して突っ込んで来たが、途中で爆発、飛び散った。第八機は艦を飛び越えて逃げ去った。すべては、四分間の出来事だった。

「マハン」は傷つきながら、三四ノットの速力を出すことができた。進路を九十度に取って僚艦に合流しようとしたが、この高速運動が、かえって火災を大きくした。火は注水装置に及んだので、前部弾薬庫に注水することができず、これが命取りになった。一〇〇〇艦長は全員退艦を命じた。人員の損傷は、戦死十、負傷三十二だった。

一一五〇「ウォーラー」の魚雷で沈めた。――

この日、我が第四航空軍は、イピルに敵上陸を知り、勤皇隊、一宇隊、護国隊、八紘隊、靖国隊、計二十一機をオルモック湾の艦船攻撃に出撃させている。

前項の米軍の記述は、時刻や機数から判断し、勤皇隊十機の攻撃であろう。機種は双発襲撃機だった。

ますらおの悲しき命積み重ね
つみ重ね守るやまとしまねを

昭和二年海軍の演習中駆逐艦二隻が沈没するという事故があり、そのとき三井甲之という歌人が詠った歌であるが、まさにこの歌のような光景である。

海軍航空については、手もとに資料がないので陸軍だけについて述べれば、特攻戦死者は二五一名で、二〇二機だから操縦者の数は二〇二名となる。この期間に戦死した操縦者の数は約一八〇〇名と推定されるので、操縦者の数だけで全般を推定すれば、空で死んだ者の一割が特攻隊員だったということになる。

一般の飛行部隊は、船団の掩護、基地の要撃戦闘、敵飛行場の爆撃等に任じ、艦船攻撃はほとんど特攻に依った。敵艦船に対し、どれほどの損害を与えたかは明らかでないが、米海軍に所属

する各種艦艇で、特攻により撃沈破されたものは、七十二隻という資料がある。この大部は我が海軍の戦果とみるべきだろう。因に、我が海軍の特攻未帰還機は、直掩機も含んで三三三機だった。米軍の輸送船の損害を知りたいものだが、今のところ資料がない。

我が航空が、追いつめられた末、正式の戦法として採り上げた特攻攻撃の、数字的総括は以上の通りである。

――親の不始末を子に押しつけたようなもの、

とある人は特攻戦法を評している。

まさにその通りだと思う。但し、ここで子というのは、ただに特攻隊員だけでなく、現地の航空部隊第一線指揮官以下とみるべきではなかろうか。

比島方面陸軍航空最高指揮官は、第四航空軍司令官富永中将だった。この人は航空部隊に課せられた重責を、苛酷なまでに感じていた。富永中将の統帥については、戦後専門家の間でも、実に批判が多い。航空作戦について素人だとか、将たる器でないとか。

しかし、そのような論者の頭には、富永中将のあの最後における醜態が、この人を眺める前提になっている。たとえ戦いは下手でも、乃木大将のように最後が美しければ、世評は違う。日本人の人物観はそんなものだ。

海軍航空の現地最高指揮官は、大西中将ではないが、大西中将が特攻隊生みの親として知られている。この人の最後は美しかったので（終戦時自刃）陸軍航空の富永中将は、よけい醜くみえる。

ここで将帥論を展開しようとは思わぬが、富永中将は、与えるものも与え得ず決戦をやれと言われても出来ぬ、というような不平は絶対に言わなかったし、部下にも言わせまいとした。

「徳義ハ戦力ナリ」と富永中将は言う。

輸送船が次々と沈められるのも、レイテの地上部隊が飢餓に瀕しているのも、総て四航軍の責任なのだ、四航軍司令官が至らぬからだと観た。

友軍に対する徳義に悖ると痛感した。

そして、祈りを込め特攻隊員の手を握り、送り出した。そのときは自分も後に続こうと思っていただろうに。

――何故最後にあのような醜態を演じたのだろうか。

それはともあれ、特攻隊員はよくぞ戦った。民族の浮沈にかかわるとき、日本人はあれだけのことができるのだということを、歴史上に永遠に刻み込んだ。

戦後、戦禍を嫌悪するの余り、特攻隊員を生み出した世相と、特攻隊員の心情を曲解した文書が少なくない。嫌々死に追いやられたように言う。

思うに、如何に戦時下とは言え、当時の若者が飛行機の操縦者を志願したのは自由意志である。その意志のない者が操縦者になれる筈がない。徴兵による一般の兵士とは違う。飛行機乗りが危険なことは、もとより覚悟の上だった。従って特攻隊編成の話がもちかけられたとき、進んで志願するのも、水の流れゆくように自然のものだった。

しかし、特攻隊員に指定され現実に死をみつめてみると、深刻なものがあった。基地に在って何日も出撃の機を待つ間、心は激しく揺り動いたのは当然だった。

一隊は通常十二機より成る。全員が一挙に突入した例はない。隊長が征き、同僚が帰らず、なおも残されて突入の機を待つ者の心情は、当事者でなければわかるまい。

そのとき、何に心の拠りどころを求めていたであろうか。この人々の手紙は数多く残されている。

そこには、宗教的なにおいは全くない。共通して感じられることは、自己の死を美しいとみる心である。

富嶽隊は、最初の一機が突入してから、最後の一機が突っ込んで部隊が消滅するまで六十六日も経過し、この戦場では最も長いが、最後の一機の搭乗員根本大尉は、――彗星の如く逝く、と郷里に書き送っている。

これは詠人不知と言われているが、

今日咲きて明日散る花の我が身かな
　　如何でその名を清く留めん

という歌も伝わっている。

美しく死にたい、――これは確かに日本人的感覚かもしれぬ。地上を這い廻る泥臭い戦いよりも、果しない大空の戦いは、美しいという感覚に通ずるものがある。

美しく死に、しかもそれが偉大な戦果を伴うならば、――このような気持が心の支えではなかったろうか。

レイテ島の各所に、それぞれの部隊の戦友や遺族の建てた慰霊碑のあることは、すでに紹介済みである。ところが、飛行部隊の慰霊碑は一つもない。

オルモック湾頭で飛散した特攻機もあろう。タクロバン飛行場に「タ」弾を投下した後、被弾して山に激突した襲撃機もあろう。その近くにある慰霊碑の碑文をみても、飛行部隊のことには一言も触れていない。

――それでよいのだ。空こそ我が墓標、我がなきがらは雲の中にあるのだ。

空の勇士は、そう言っているような気がする。

海上挺進部隊創設ノ由来

陸軍海上挺進第三戦隊
皆本　義博

陸軍海上挺進戦隊に関しては、既にある程度ふれているが、この部隊の創設に関して、西浦節三陸軍中佐（42期）の書かれた貴重な遺稿があるので、お目にかける。なお中佐の略歴は、末尾にかかげてある。

陸軍海上挺進戦隊の発足は、昭和19年4月頃、鈴木宗作船舶司令官以下関係者の間で、敵の反攻に対処するため、軽量で高速の攻撃艇を、あらかじめ敵の予想上陸正面に配置し、敵上陸船団を夜間側背から攻撃する構想が生まれ、船舶司令部に斉藤義雄少佐（44期）を隊長として18名の特別攻撃研究班が設置された。

西浦中佐は、当時陸軍船舶練習部研究部に居られ、これ等に密に関与され親しく指導をされていた。ここでは、原文のままけい載する。

一、海上挺進部隊ノ創設由来

昭和十八年頃ヨリ南東方面ノ戦況逐次悪化シ次デ中部太平洋方面亦敵ノ進攻スル處トナル

軍ハ斯ル小島嶼ノ防禦ニ関シテハ航空ノ優勢ヲ以テ之ニ対シ殊ニ敵上陸船団ヲ海上ニテ撃滅セントセシモ航空ハ常ニ敵ニ一籌ヲ験シアル状況ナルヲ以テ何等カノ手段ヲ講ジ敵ノ上陸前海上ニテ撃滅スル方途ヲ研究中ナリ

然ルニ物量ヲ誇ル敵ニ対シ物量ヲ以テスル対抗ハ両国ノ一般状況上到底見込ナク茲ニ有ユル方面ニ亘リ捨身ノ戦法ヲ以テ必死敵ニ体当リヲナスベキ所謂特攻戦法ヲ採用スルヨリ他ニ方途ナシトスルニ至レリ

尤モ一方他ニ帝国独特ノ科学技術ノ精髄ヲ探窮シテ之カ対策ヲモ常ニ研究ハ続行シ且研究又ハ着想ニ於テ成功セルモノアルモ大量整備其ノ他実用ノ域ニ到達セシムル為ニハ幾多ノ隘路ヲ包蔵シアリ又匆々ノ間教育ニ便ニシテ訓練ノ精到ヲ期スルノ要アル等ノ為自ラ技術・戦技的ニモ簡単ナルヲ要求セラルルニ至レリ

昭和二十年四月在宇品船舶司令部ニ於テハ当時ノ司令官鈴木宗作中将以下「海上ノコトハ我々船舶部隊ノ手ニテ処理スベシ航空部隊ノミニ島嶼防衛ヲ委任シテ可ナリヤ」トノ熱烈ナル意見抬頭シ依テ最モ簡単軽量ナル人間魚雷式ノモノヲ事前ニ予想敵上陸点附近ニ無数配置秘匿シ敵上陸ニ方リ上陸地点附近ヨリ発進目前ニ於テ上陸ヲ企図スル敵輸送船ヲ攻撃セシムベシトノ着想ノ下ニ船舶本廠ヲシテ小型快速舟艇ヲ試作セシメタリ同時ニ条件トシテ

1、ナシ得ル限リ軽量小型ニシテ陸上秘匿臂力運搬可能ナルコト
2、時速概ネ二十浬以上ナルコト
3、敵輸送船ヲ撃沈シ得ル爆薬ノ装着可能ナルコト
4、乗員ハ一名乃至二名ナルコト
5、大量製産可能ナルコト

等ヲ示シ船舶司令部ニ技術的戦術的ノ研究ニ沒頭セシメタリ

一方大本営ニ於テモ技術研究所ヲシテ肉迫攻撃艇トシテ技術的研究促進シアリ又船舶司令部ノ前述ノ着想ニ同意シ着々研究ヲ促進シ昭和十九年五月頃ニハ技術研究所ニ於テモ宇品ニ於テモ概ネ試作完了シ若干ノ改造ヲ加ヘテ遂ニ八月十一日頃迄ニ三十隻ヲ整備スルコトトナッテ用法的研究ヲ進メツツ編成ニ逐次着手スルニ到レリ

当時海軍ニテモ同様着想ヲ以テ研究セラレ合同ノ研究演習ヲ実施セラル陸軍試作艇ハ海軍ノモノニ比シ稍優秀ナリ

二、編成用法戦斗法

船舶司令部ニ於テ自ラ此ノ種舟艇ヲ使用シ研究セル結果ヲ基礎トシ大本営ニ於テ概定シ関係各部隊ニ示セル此ノ種部隊ノ用法戦斗法ノ骨子左ノ如シ

1、現地ニ於ケル最高指揮官（通常軍司令官）ノ直轄トスルコト
此種部隊ハ一部局部ノ戦況ニ眩惑セラルルコトナク敵ノ上陸企図ニ應ジ務メテ統一指揮スル要アルト初回ノ使用時機如何ハ全部隊ノ運命ヲ左右スルコト竝ニ絶対ニ企図ヲ秘匿スルノ要アル等ノ理由ニヨリ現地ノ最高級指揮官ノ直轄トシテ使用スルヲ可トセリ

2、企図秘匿ヲ絶対ノ要件トス
本着想ハ有史以来ノ新企図ニシテ而モ一度敵ニ企図曝露セバ対應ノ処置比較的容易ニ講ゼラルベキニ鑑ミ内地ニ於ケル舟艇ノ整備ハ因ヨリ此ノ種部隊ノ存在、配置、戦法等各般ニ亘リ本企図ノ完全ナル秘匿ハ作戦成功ノ絶対的要件ナリ

3、攻撃前ニ於ケル基地ノ秘匿及掩護ヲ十分ナラシムルコト
本舟艇ハ其ノ性能殊ニ其ノ速度ト航続力ノ関係上概ネ予想スル敵上陸点附近ニ配置スルヲ要ス然ルニ敵ノ慣用戦法ハ其ノ上陸点附近ハ常ニ事前ニ一物ヲモ残サザル程度ニ艦砲射撃及爆撃ニヨリ清掃ニ努ムルヲ以テ出撃前ニ基地ニ於テ発

見セラルルニ於テハ因ヨリ発見セザレザル場合ニ於テモ十分敵ノ砲爆撃ニ抗シ得ベキ掩護ヲ有スルニ非ザレバ攻撃ハ事実上不可能ニ属ス故ニ現地各軍ハ位置ノ選定ニ留意スルト共ニ決定セル基地ハ其ノ秘匿及掩護ノ為事前ニ十分ニ処置ヲ講ゼザルベカラズ

4、奇襲及大量一斉使用ナルコト

第一項ノ理由ニ基キ当然ノコトニシテ假ニ戦略的奇襲ニ成功スルモ戦術的奇襲不可能ナラバ敵ハ應急対應ノ処置ヲ講ズベク此ノ際ニ於ケル対策トシテ数量ニヨリ敵ヲシテ対應ノ処置ナカラシメ假ニ百隻ヲ以テ攻撃シ敵ニ発見セラルルモ半数又ハ三分ノ一ニテモ目標ニ到達シ得ル如ク而モ各方向ヨリ同時ニ攻撃ヲ行フコトニヨリ目的ヲ達成スルヲ得ベシ

又奇襲ノ為ニハ本部隊夜間攻撃ニアラザレバ実行不可能ナルコト勿論ナリ

5、攻撃時機攻撃目標

目標ハ舟艇ノ有スル威力及速度(二〇節)航続力(約五時間)ヨリシテ泊地ニ進入シアル敵輸送船ヲ主トシ情況ニ依リ已ムヲ得ザレバ軽艦艇トス

其ノ時機ハ軍司令官ノ命ニヨリ敵輸送船団ノ泊地進入直後ヲ最モ適当トスルヲ以テ通常敵上陸当日未明迄已ムヲ得ザレバ翌日ノ夜トス

6、攻撃要領

戦隊長指揮ノ下高級指揮官ノ命ニ基キ日没後泛水シ概ネ一戦隊(百隻)又ハ一中隊(概ネ三十隻)毎ニ航行シ目標ニ向ヒ接敵前進ス

此ノ間敵護衛警戒艦艇ニ遭遇セバ警戒艇又ハ一部ハ之ニ犠牲的ニ体当シ主力ヲシテ之ヲ回避セシメ一意目標ニ向ヒ前進ス

目標タル敵船団ニ対シテハ通常同時ニ(数戦隊協同シテ攻撃スル場合ニ於テモ)攻撃シ得ル如ク目標ニ接近セバ分散シ概ネ三〜九隻ヲ以テ敵一輸送船ヲ目標トスル如ク各方面ヨリ攻撃ス

攻撃ハ即チ体当リ肉弾ノ要領ヲ以テ敵船ニ接觸驀進シ接觸時爆雷投下ニヨリ敵船撃沈ヲ図ル

概ネ以上ノ着想ヲ以テ運用ヲ律セラレタリ然ルニ比島沖縄等ニ於ケル経験ニ鑑ミ大量一擧使用ハ逐次時間的縦長使用ヲ可能ナラシムルト共ニ之ニ伴ヒ必ズシモ其ノ基地ハ海岸ニ限定セズ寧ロ陸上奥地ニ秘匿シ必要ニ應ジ陸上機動ニヨリ海岸ニ泛水シ逐次攻撃セシムルコト可能ナルニ到レリ

又初回ニ於テ全般的企図ハ已ニ暴露シアルモ用法殊ニ使用時機当リ得レバ今後ト雖モ不成功ト断定シ得ザルニ到リシ為比島作戦後ニ於テモ各軍ハ此ノ海上挺進作戦企図ヲ放棄スルコトナカリキ

三、編成及要員養成

海上挺進部隊ハ所謂特攻ニ任ズベキ戦斗部隊即チ海上挺進戦隊ト其ノ基地設定舟艇整備等基地作業ニ任ズベキ海上挺進基地大隊トニ分ツ而シテ戦隊ハ数ケノモノヲ軍ニ隷属セラル場合ニ於テモ之等ハ夫々直接軍司令官ノ直轄タラシムル如ク之ガ統轄機関ヲ設ケザリシモ基地大隊ハ之等ヲ直接高級指揮官ニ直轄セシムルハ繁ニ堪ヘサルヲ以テ数個基地大隊ヲ統轄スベキ海上挺進基地隊本部ヲ編成スルコトトセラレタリ

又戦隊ト基地大隊トノ関係ハ一戦隊ニ対シ一基地大隊トシ同一軍号ノモノヲ組合スコトトシ若シ戦隊長ガ基地大隊長ヨリ先任ノ場合ニハ別命ナク当戦隊ノ基地勤務ニ関シ基地大隊長ヲ区処シ得ル如クセラル

戦隊ハ長以下約一〇〇名舟艇(企図秘匿上連絡艇ト稱ス)約一〇〇隻トシ之ヲ指揮機関及三中隊ニ分ツ一中隊ハ連絡艇約三〇隻ヨリ成ル

戦隊ハ戦術單位中隊ハ戦斗単位トシ中隊ハ更ニ之ヲ三小隊(群)ニ分チ小隊(群)ヲ以テ最小ノ單位トス

戦隊長ニハ凡テ正規ノ陸軍士官学校出身少壮ノ少佐大尉ヲ充当中隊長ニハ主トシテ昭和十九年任官スベキ陸軍士官学校第五十七期生中船舶兵ノモノヲ主体トシソノ他幹部候補生出身少壮中少尉中特攻志願者ヲ以テ又小隊長(群長)ニハ昭和十八年徴集兵中ノ船舶兵甲種幹部候補生ヲ主体トシテ概ネ見習士官ヲ以テ又一般ノ兵ハ昭和十九年度第一次採用船舶兵特別幹部候補生ヲ主体トシ其ノ他不足ノ分ハ之ヲ船舶兵其他弘ク全軍ヨリ少壮特攻志願ノ者ヲ採用編成セリ

第一次編成ハ九月上旬船舶司令官管理ノ下ニ第一乃至第十戦隊引続キ第十一乃至第三十戦隊迄編成セラレタリ

右ノ内第一乃至第十戦隊要員ハ八月十日頃ヨリ逐次小豆島ノ船舶兵特別幹部候補生隊ニ要員養成第十一戦隊以下ハ九月上旬以降広島湾ニテ要員養成セラル

基地大隊ハ作業三中隊整備一隊ヨリ成リ総人員約一〇〇〇名ナリ

之ガ要員養成ハ広島船舶司令部整備教育隊ニ於テ担任セリ

四、研究教育

船舶司令部ニ於テハ七月中旬各隷下部隊ヨリ適任ノ將校三十名ヲ簡抜シ船舶本廠ニテ試作セル舟艇三十隻ヲ配当シ広島湾内ノ離島大カクマ島ニ位置シ將来ノ該部隊編成基幹人員トシテ用法的研究及教育ニ着手ス

昭和十九年八月ニ入ルヤ広島湾ニ於テ此ノ種部隊要員ノ教育竝ニ研究ハ防諜等ノ関係ヨリ適当ナラザルト將来船舶兵特別幹部候補生中ニテ右部隊要員ヲ充足セントスル意図アルトニヨリ右船舶兵特別幹部候補生隊ノ在ル瀬戸内海小豆島ニ之ヲ移動セシメ船舶兵特別幹部候補生隊長ノ指揮下ニ入ラシメ研究訓練場ヲ小豆島西側ノ豊島東方ノ海岸ニ指定シ秘カニ研究及要員教育ヲ実施スルコトトシ九月上旬迄之ヲ続行セリ

此ノ間此ノ部隊ニ関スル戦術的研究編成案等逐次具体化シ九月上旬以降逐次軍令ニヨリ部隊ヲ編成セシムルニ至レリ

一方大本営ニ於テハ船舶司令部ニ於ケル研究ヲ基礎トシ該部隊ノ用法及部隊訓練竝戦斗ノ準繩タルベキ「海上挺進部隊戦斗教令」ヲ発令シ之ニ依リ訓練用法ノ準繩ヲ与フルト共ニ現地関係各軍参謀長及主任ノ参謀ヲ招集シ宇品及小豆島附近ニ於テ教育研究中ノ部隊及舟艇訓練ヲ供覧普及教育ヲ実施スルト共ニ近ク配置セラルベキ各軍ニ於ケル現地事前ノ準備促進ニ資セシメラレタリ

昭和十九年九月概ネ第一乃至第十戦隊迄ノ基本教育ヲ匆々ノ間ニ実施セル後此ノ部隊ノ教育（要員養成）ハ諸般ノ関係上再ビ宇品ニ移シ船舶練習部長ノ指揮下ニ入ラシメラルルニ到レリ

各戦隊ハ所謂特攻部隊ナルニ拘ラズ情勢ニ即應セシメントスル為殆ンド事前ノ訓練ヲ実施スル遑ナク部隊ヲ編成シ直ニ各現地軍ニ推進セシメラレタルヲ以テ訓練ハ將来戦斗配置ニ就キタル後及推進ノ途中ニテナサザルヲ得ザル悲シムベキ情況ナリ

加之内地ニ於ケル基本訓練ハ練習用舟艇ノ不足ニ伴ヒ一人当リ配当セラルベキ訓練時間ハ極メテ短少ニシテ情勢上急ヲ要ストハ云ヘ特攻部隊將兵ノ訓練トシテハ余リニモ簡單ニ過ギ確乎タル必勝ノ確信ヲ有ラシムルニ至ラザリシハ誠ニ遺憾ト云ウトコロナリ

斯クシテ特攻精神ニ燃エタル將兵ハ意気衝天ノ態アルモ惜ムラクハ概ネ戦技ニ関シ自信ヲ有スル者ナク不安ノ中ニ現地ニ逐次推進セシメラル

現地ニ到着セラレタル各部隊ハ比島ニ於テハ基地準備着手匆々ニシテ敵ノ出現ニ曾シ因ヨリ準備極メテ不十分ナリ又他ノ地区ニ於テモ現地即チ自隊ノ戦場ニシテ企図秘匿ノ必要上海上訓練ハ制限ノ已ムヲ得ザル状況ナルノミナラズ燃料ノ不足ハ亦此ノ貴重ナル訓練不可能ノ重大ナル因子トナリ実績必ズシモ擧ラザリシ重大原因トナルニ至レリ

作戦上ノ要求トハ云ヘ誠ニ此ノ種特攻隊要員ヲ必成ノ確信不十分ナル儘戦場ニ送リ出スガ如キハ統帥ノ誤リナルヲ銘肝セズンバアラズ

五、大本営ノ海上挺進部隊使用企図

(一)運用ノ方針

敵ノ上陸予想正面ニ隠密ニ直接配備シ敵ノ上陸開始ニ先チ不意且急襲的ニ一擧大量ヲ使用シ以テ敵輸送船団ヲ海上ニ撃滅ス

之ガ為泊地ニ在ル大型輸送船ヲ主目標トス

(二)部隊ノ配置

(1)昭和十九年末迄ノ期間

比島ニ対スル敵ノ本格的上陸ハ二十年初頭頃ト判断シ整備シ得タル海上挺進部隊ノ全力ヲ年末迄ニルソン島ニ展開スベク企図シ後半ニ至リ逐次推進展開ニ着手セルモ敵ノレイテ上陸ニ会シ資材ノ整備要員ノ訓練竝ニ輸送船腹ノ制扼ヲ受ケ一部ヲルソン島ニ推進セシメ得タルニ過ギズ大部ハ已ムヲ得ス台湾ニ残置シ同方面ノ作戦ニ充当スルコトトセリ

(2)昭和二十年前半期

比島ノ失陥ニ伴ヒ敵ノ次期上陸目標ヲ沖縄諸島ト判断シ二十年初頭ヨリ国内ニ於テ整備スル部隊ノ大部ヲ沖縄ニ展開ス

(3)昭和二十年後半期

沖縄失陥後本土決戦準備トシテ海上挺進部隊ノ主力ヲ関東及九州方面ニ重点的ニ配置スベク企図セルモ資材整備ノ関係上殆ンド配置スルコトナク終戦ニ至ル

(三)陸海軍ノ関係

海上挺進部隊ノ使用ニ関シテハ本土決戦準備ニ於テ之ガ運用ニ就キ協定シ相互協同作戦スルコトニ決ス

資材ノ整備要員ノ訓練等ハ陸海軍独自ニ実施セリ

(四)企図ノ秘匿

海上挺進部隊ノ使用舟艇ノ性能ニ鑑ミ絶対ニ企図秘匿ヲ要シ資材ノ整備要員ノ訓練部隊ノ展開現地ニ於ケ

ル秘匿作業等全般ニ亘リ特ニ留意セリ

之ガ為訓練不十分ナル部隊ヲ作戦地ニ推進セルモ之ガ現地訓練ハ極力之ヲ抑制セリ

(五)使用開始ノ時機

挺進部隊ノ効果ハ其ノ第一次作戦ノミニ限定セラルルヲ以テ大本営トシテ全般ノ作戦ヲ考慮シ之ガ使用開始ノ時機ハ現地軍司令官ノ独断ニ委ヌルコトナク大本営ヨリ指示スルコトトセリ

六、海上挺進部隊ノ作戦

海上挺進部隊ノ通信装備指揮機関ノ不備展開ニ伴フ輸送ノ不規等ニ禍セラル中央ハ勿論現地軍トシテモ之ガ掌握極メテ不十分ニシテ且予想ニ反シ敵ノ上陸時機モ早期ナリシ為現地軍ノ該部隊作戦計画及作戦ノ実施ニ関シテハ資料不十分ナルヲ以テ之ガ大要ヲ記述ス

(一)比島ニ於ケル海上挺進作戦

(1)昭和十九年十月末頃比島方面最高指揮官ノ意見具申ニ基キ大本営ハ爾後同方面作戦ノ為海上挺進部隊ノ使用ヲ認可ス

(2)比島ニ於ケル配置

頭初配置ノ重点ハルソン島東海岸レガスピー地区及同島南海岸バタンガス正面トシ逐次展開中ナリシモ敵情判断ノ変化ニ伴ヒ之ガ重点ヲリンガエン湾方面ニ変更シ之ニ應ズル如ク展開中同方面ニ敵ノ上陸ヲ見ルニ至レリ

其ノ配置概ネ左ノ如シ

リンガエン二隊　マニラ湾三隊

ラモン湾四隊　レガスピー二隊

而シテ内地ヨリ海上船舶輸送遅レ且諸隊堅牢ヲ欠ギ為ニ損害多ク一五隊一五〇〇隻予定ノ中到着セルハ其ノ半ニモ達セザリキ

敵上陸開始前ニ於ケル爆撃ニ依リ海岸ニ配置セル舟艇ハ殆ンド破壊サレタルモノノ如ク只第一次上陸ニ際シ「ナスブグ」「リンガエン」「インファタ」等ニ於テハ挺進部隊ハ該船団ニ突入セルモノノ如ク相当ノ効果ヲ擧ゲタルモノノ如キモ其ノ戦果ハ詳細不明ナリ

(二)沖縄ニ於ケル海上挺進作戦

(1)沖縄ニ於ケル配置

敵ノ主上陸正面ヲ沖縄本島西及南海面ト判断シ在沖縄挺進部隊ノ約半部ヲ沖縄本島ノ西側慶良間群島ニ残部ヲ沖縄本島南部海岸ニ配置ス

(2)作戦ノ実施

敵ノ上陸開始ニ伴ヒ我航空ノ特攻攻撃ト呼應シ敵船団ヲ攻撃セルモ大部ハ敵上陸開始前ノ爆撃ノ為損耗セルモノノ如ク戦果ハ不明ナリ

西浦節三中佐略歴

昭5陸士卒（42期）

昭12・10　陸大卒歩9中隊長で南京攻略戦参加

昭14・5　参謀本部部員大本営へ

昭15・8　元帥守正王副官

昭16・11　第16軍参謀ジャワ戦へ

昭17・10　関東軍参謀（第三課）

昭19・1　船舶練習部研究部主事

昭19・9　第10方面軍参謀（台湾）

陸軍初の海上挺進作戦

（捷号陸軍作戦）(2)抜粋

編者挿入

海上挺進第十二戦隊長高橋功大尉（54期）以下同戦隊の七十八勇士は一月九日、スアルから発進し、リンガエン湾内の敵艦船群に突入して玉砕した。陸軍初の海上挺進作戦であった。米国海軍省戦史部編纂の「第二次大戦米国海軍作戦年誌」には次のように記述された。

一九四五年一月九日（火）海軍艦艇の砲火および空母航空機掩護の下に、米国陸軍部隊リンガエン湾（フィリピン諸島）に上陸。ダグラス・マッカアーサー陸軍大将全作戦を指揮。TCキンケイド海軍中将海軍部隊を指揮し、Wクルーガー中将地上部隊を指揮す。上陸支援のため高速空母機動部隊（指揮官JSマッケイン海軍中将）臺灣、琉球および澎湖列島の日本軍飛行場および艦船を爆撃。

米国艦艇の損傷

護衛駆逐艦ホッジス（DE―二三一）フィリピン諸島海域一六度二二分N、一二〇度一二分Eにおいて特攻艇により。

兵員輸送艦ウオアホーク（APー一六八）フィリピン諸島海域一六度二〇分N、一二〇度一〇分Eにおいて特攻艇により。

一月十日（水）米国艦艇の損傷

戦車揚陸船LST―六一〇　フィリピン諸島海域一六度二〇分N、一二〇度一〇分Eにおいて特攻艇により。

高橋戦隊長以下は瞑するに足る戦果をあげた。しかし、捷号決戦に準備した三、〇〇〇隻中の約七〇隻がこの攻撃に参加しえたにすぎなかった。

忘れ難い人たち　回天⑧

小灘　利春

小林　富三雄

三重県。海軍機関学校第54期。回天搭乗員。中尉。
轟隊で沖縄東方洋上へ出撃、戦死。
没後少佐。

小林富三雄（轟　隊）（イ361潜）

海軍機関学校を優秀な成績で卒業し、戦艦伊勢乗組を経て昭和19年9月回天の訓練基地大津島に着任、搭乗員を命ぜられた。9月21日に最初に到着した第13期甲種飛行予科練習生出身の下士官搭乗員たちの分隊士を小林富三雄少尉がつとめ、20年5月の彼自身の出撃まで続けた。土浦航空隊出身百名（のちに半数が新設の光基地に移動）と奈良航空隊出身の百名にとって最も身近な存在であった。

分隊長は最初、「同期の桜」の歌を作ったことで知られる兵学校71期の帖佐裕中尉であったが、搭乗訓練の計画、運用、指導で忙しいため、暫くして私が引き継いだ。毎日の訓練が我々にとっては最優先であるが、そのかたわら小林分隊士と私は緊密に話し合いながらつとめた。

下士官搭乗員の誰から回天の操縦訓練に入るか、大津島基地の指揮官板倉光馬少佐の指示があり、二人で真剣に協議して候補者リストを作成したこともある。

兵器の数が少なく訓練の順番が回ってこないために下士官搭乗員たちが元気を持て余すので、発散できるような作業計画を日々作成するのも結構苦労であった。また分隊員が出す手紙は分隊長が捺印して発送する規定であるが、私自身が検閲したことは一度もない。目的は機密の漏洩防止であるからすべて小林分隊士が一人でチェックし、私の印鑑を押して発送していた。

やや小柄であり、女性と見まがうほどの色白で唇紅い美少年であったが、機関学校の激烈な鍛錬を経てきただけに肝が据わっていた。下士官搭乗員たちも小林分隊士に随分と親近感を抱いているようであった。

回天特別攻撃隊轟隊の伊号第三六一潜水艦は五基の回天を搭載して5月24日光基地から出撃した。搭乗員は隊長小林富三雄中尉と甲飛13期出身の下士官搭乗員金井行雄（群馬県）斉藤達雄（茨城県）田辺晋（千葉県）岩崎静也（北海道）の各一飛曹であった。

沖縄東方洋上の敵輸送船団攻撃に向かったのであるが、その後同潜水艦より一切連絡がなく、6月15日戦没と認定された。

同艦の行動について内外に数多い戦記が殆ど触れていない。欠落、乃至は「5月30日、護衛空母アンジオ搭載機の爆撃を受けて沈没」と僅か一、二行の記述にとどまり、我々も長年調査に努めたが事実を探る手掛かりがなかった。

このほどようやく同艦の戦闘状況と不明の理由が判明した。入手できた米軍資料には何と「最高機密」と表記されており、つい何年か前まで公開を停められていたのである。交戦の地点と日付も作為か錯誤か、これまでの記事は違っていた。

対潜水艦掃討作戦で名高い護衛空母アンジオの搭載機が5月31日未明、レーダーで潜水艦を発見し、低い雲の中で旋回を繰り返しながら偵察していたが、突如降下して浮上潜水艦の真横からロケット弾四発を発射した。至近弾であったが命中せず、潜水艦は急速潜航した。その跡の渦へ艦載機は超低空から「二四型機雷」を投下、四分経過後水中爆発が起こった、と報告書は述べている。

問題はこの二四型機雷にあった。米海軍の最新秘密兵器「聴音魚雷」すなわち、潜水艦の推進機音を聴きながら追尾する魚雷だったのである。ドイツに派遣された伊五二潜が大西洋で沈んだのもこの魚雷のためであるが、米国は最近まで「爆弾」とだけ発表していた。

当時の日本潜水艦は夜間、必要な充電と移動のため浮上して航走していた。この宿命のために伊三六一潜はレーダーに捕捉され、さらに思いがけない新兵器の奇襲を受けて無念にも南溟に沈んだのである。しかし搭載回天はどうであったか。

敵艦載機はロケット攻撃以後潜水艦の真上を低空で通過し、照明弾を投下して三人の乗員が詳細に観察していた。護衛駆逐艦ほどの大きさ、黒色塗装、大砲を持っていない、艦橋が前に伸びた艦型、などと実に綿密な報告をしている。しかし、発進前ならば前後の甲板上に並んでいる筈の回天を見ていない。潜水艦の備砲は艦橋の前とは限ら

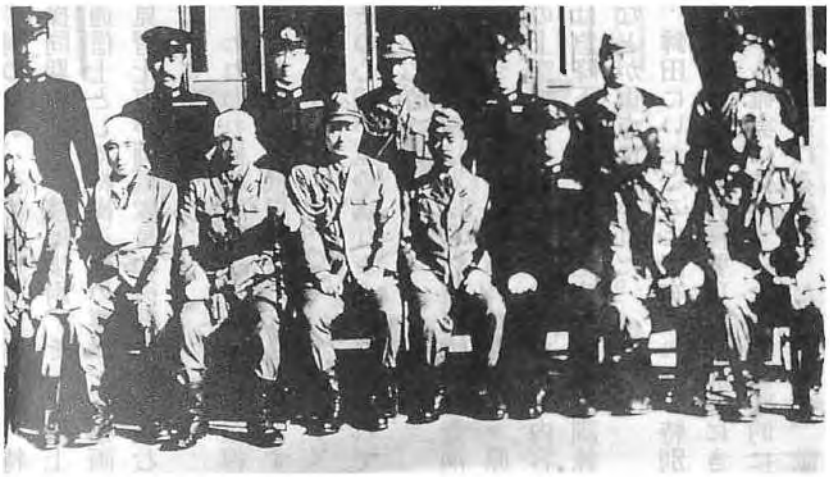
ず後甲板に配置する例が日米とも少なくないので、砲がどこにもないことに気付くほどの観察力があれば、回天が若し甲板上にあれば当然わかったであろう。従ってこの交戦前に回天は既に発進し、敵艦船を攻撃していたものと判断される。私はその攻撃状況を小林分隊士のためにも今後さらに調査、確認を続ける責務を覚える。

没後海軍少佐。御墓は三重県三重郡の菰野町にある。

田辺　晋

金井　行雄

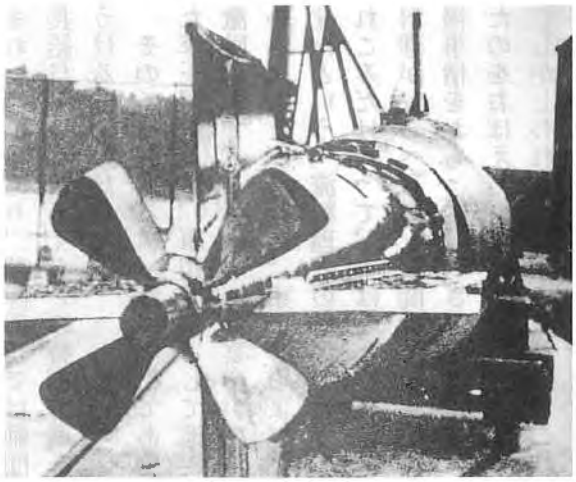
斎藤　達雄

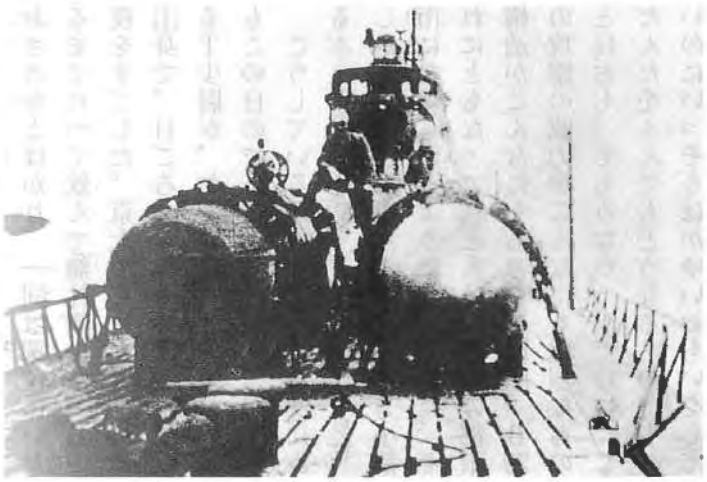


轟隊伊361で出撃前
前列左から三人目が小林中尉

岩崎　静也

伊361光基地を発つ
20・5・23





特操二期会会報より

誇り高き愛機「屠竜」で得た散華への片道切符

二八会　樋口　政市

優遇された特攻隊員たち

私の隷属(れい)していた鉾田教導飛行師団が、茨城県鉾田の基地から、栃木県にある黒磯飛行場に移駐したのは、太平洋戦争の敗色も濃くなった昭和二十年の春三月であった。当時、すでに鹿島灘の沖合には、日本の航空戦力の低下をあざ笑うかのように、米海軍の機動部隊が遊戯し、関東地方一帯は、しばしば艦載機による空襲にみまわれるようになった。

鉾田を進発した万朶(ばんだ)特攻隊が比島で散華してからというものは、航空戦力は急速に特攻と化し、われわれの部隊でも黒磯にうつってまもなく特攻編成がおこなわれた。これは「決と号部隊」とよばれ、本土決戦に投入させるための特別攻撃隊であった。

この編成に名をつらねたものは〝お前たちの生命は近々おしまいになるのだぞ！〟という意味の命課であったにもかかわらず、われわれは平静にこれをうけとめていた。それというのも八日市の基地から第四次補充要員として鉾田師団に転属する時、すでにこのことは予期していたからであろうか。わたし自身も、多少の緊張はあったが、さして緊迫感はなかった。一死殉国の境地に近づいていたのか、軍隊教育の徹底さに神経がマヒしていたのか、いまもって不明である。私は五七期の諸井中尉を隊長とする第二〇八神鷲隊に配属された。この隊には五七期の須合中尉のほか、召集尉官の前田少尉、特操同期の木下、横尾少尉、そして機上通信士として特操三期の粟津、板橋両見習士官が両編隊長の後方に乗り組むことになった。

われわれ操縦者はともかく、操縦桿もにぎれず、戦果報告だけを任務とする両見習士官については、なにかしら、その心境が気の毒なようにおもわれてならなかった。

特攻訓練はとぼしい航空燃料を費消しつつ、暑気のくわわった那須野ヶ原の上空ではげしくつづけられた。内容は急降下突入、超低空攻撃、航法訓練などが重点におかれた。

鉾田にいたころに配布された、特別攻撃についての各種要項は、那須にきてから確実に体得するよう、徹底的にたたきこまれるのだった。とくに、敵艦を発見し、これに突入するときのこころがまえである操縦桿のささえかたについては、「人生最後の力だ！　押せ！　押せ！　押せ！」であったことがいまでも記憶にのこっている。

五〇度、六〇度の急降下にあたっては押して押して操縦桿をささえながら、機を敵艦に指向しなければ、恐怖心とともに機はうきあがってしまい、海面スレスレの目標へは、とうてい到達しえないからである。

高度一、〇〇〇ないし、二、〇〇〇メートルから、緒元を調整しながら、地上二〇メートル～三〇メートルまで急降下したのち、水平飛行にうつる突撃訓練は、かんたんなようでなかなか度胸をひつようとするものであった。

二十年五月のはじめ、特攻隊の編成が発表されたのちも、南方各戦線における日本軍の反撃ののぞみもなくなり、B29の爆撃によって、本土全域が焼土と化しつつあった。したがって本土決戦はいよいよ避けられない様相をおびてきた。そこで土井部隊長を中心に、那須基地における上層部でもそのような状況判断から特別なはからいとして、『決と号隊員』を新那須温泉最大の旅館である「山楽」を指定宿舎とすることがきめられた。残りすくない若い生命へのおもいやりと、〝いざ〟というときの団結を期するための意図もふくまれたものであり、部隊俗語では師団長給与といわれるくらいの特別待遇をうけることになった。

そのころのある日、陸軍中将であった李王垠殿下が、軍司令官として巡視激励にきて、一夜さかんな宴会がひらかれたことがあった。東京からよびよせたという一流料理人の料理というふれこみだけあって、すばらしい美味な料理がならべられ、民間のとぼしい食糧事情をおもって、いささか気がひけたのをおぼえている。

しかしわれわれにしてみれば、これがこの世におけるおいしいものの食べおさめかとばかり、一同は深夜にいたるまでたべて飲んで無礼講のたのしい夜をすごした。京大のインド哲学科の出身で、日ごろかたぶつでとおっているT少尉が、おおいにハッスルしたのもこの日のできごとであった。

こうしているあいだにも、B29による本土攻撃はようしゃなくつづけられ、しかもその目標はだんだんと地方小都市にむけられるようになってきた。それにともなって私どもは、日本の都市構造がこんなにももろく、反面、B29の攻撃の威力がこんなにも猛烈なものとはおもってもみなかっただけに、じだんだをふんでもどうなるものでもないのにいっそうはがゆいおもいをして

いた。

各種のニュースによって、日本の惨敗への道を感じながらも、われわれ那須部隊の日課は、出身のことなる将校による混成の部隊でありながら、必勝を信じ、ただ邁進あるのみと、天候と燃料の可能なかぎり、暑さもわすれてはげしい訓練がつづけられた。

しかし、敵の空襲をさけながら、ころぼそい貯蔵燃料を調整しながらおこなう飛行訓練の時間は、決して十分とはいえなかった。なにしろ『ガソリンの一滴は血の一滴』ということばは文字どおりの意味をもっていた。

われわれ『と号隊員』は命課とどうじに、いままでの航空部隊章、空中勤務者章という二つのウイングマークのほかに、日の丸の胸章もつけることになった。おかげで軍服の胸のあたりがずいぶんはでなものとなり、街を歩いているとみも知らない人びとからていねいなあいさつをされ、そのつどかえって心がおもくるしくなるのだった。

ワラをもつかむ、という気持だったであろうとうじの街の男女が、われわれ特攻隊員を〝生神様〟のようにおもうのはよくわかるので、われわれはそれらの人びとの期待にたいし、一面やり場のない気持とともに、反面大きなムチの音を耳にするおもいであった。

生と死をわけた密雲群

五月の末、ついに沖縄がおちると、内地の各航空部隊からも、沖縄基地回復のため、この作戦に投入される部隊ができ、関東以北からも、九州南端の知覧基地に集合していく特攻隊がみられた。そして那須基地にもこの種の特攻機が幾度か立ちよった。そのようなとき、直協機とよばれる単発機を愛機とする操縦者たちは、悲壮な声でいったものだった。

「貴様らはいいなァ。俺はこれといっしょに行くんだぞ！」

と自分の運命をともにするはずの、つかいふるされた、翼端失速でゆうめいな〝機〟をいいしれぬ危惧の表情でみやっていたものもあった。この小さな機の腹にだいた二五〇キロの爆装は、われわれにはいかにもいたいたしくみえた。

彼らの使用機にひきかえ、われわれの愛機は、双襲といわれ屠龍とよばれる新鋭機であり、二五〇キロ爆弾二発を装着することができた。その優秀機を道づれにすることができるだけでも、われわれ誇りをもたなければならなかった。

また〝わがままをいってはもうしわけない〟と思わなければならなかった。

あわただしい戦雲のなかにあって、人びとはそれぞれの運命をになっているのだ。われわれは、ひたすらに、彼らと、その愛機の武運とその戦果を祈るよりほかにすべはなかったのだ。

七月にはいると、黒磯基地にも大規模な米軍の攻撃をうけるようになり、黒磯の町にも若干の死傷者がでた。

われわれの兵舎が、飛行場の東北角の鳥の目の浄水池のあるカマボコ兵舎にうつされたのもこのころであった。空襲をさけての処置ではあったが、飛行場には不便な地点であり、敗戦者のみじめな気持が胸にしみた。積乱雲がよくでる真夏の那須高原はわりあいに湿度が高く、暑さは体力の消耗に拍車をかけた。特攻隊員の楽しみであった航空糧食も、心なしか減ってきた感じだ。

八月にはいって広島、長崎に新型爆弾が投下された、というニュースがつたえられ詳報が判然としないまゝ流言的な話題が雑多にいりみだれてつづくようになった。しかし政局が終戦への道に急転回しているとは、われわれ仲間は夢にもおもっていなかった。

八月十日もすぎて、連日のように敵の大機動部隊が本州北部の東岸に来襲したらしく、大編隊による敵機の攻撃は、飛行場の地面をひきさくようなはげしいものとなってきた。いわゆる必勝の信念はもうそろそろうしなわれてきたのか、悪夢の襲来をおもわせるあの重圧音が聞こえてくると、恐怖も、闘志もいっぺんに消えうせて、ただなさけないなァというおもいだけがさきにたつのだった。

この緊急切迫ともえる状況下にあっても、「敵の本土上陸作戦に一気に投入する」という特攻隊の使用に関する軍の作戦方針が変更されないかぎり、われわれ隊員の生命はもうすこしはながらえることができるのだ。だが、それでは基地周辺の人びとの不安はますばかりだった。

そのうえ、

「いったい那須の特攻隊はなにをしてるんだ」

という声がヒソヒソとささやかれるようになった。無理もない。〝生神様〟とばかりたよりにしていた特攻隊員サンが空襲となると、真ッ先に専用バスで安全な場所に待避するしまつなのだから…事実この時代における那須基地周辺を攻撃した敵機の行動は、防空戦力も対空火器もまったく無視した不敵なものであった。かけがえのない特攻機も数機が炎上し、整備員の戦死傷者もでた。

このようにして那須部隊は敵の本土上陸まで、べんべんと、その戦力を温

存するには堪えられない、急迫の事態においこまれてしまったのだ。もはやだんことして不敵な鹿島灘洋上の米機動部隊を攻撃しなければならないのだ。

土井部隊長以下首脳部の決意はかたまったのであろう。神鷲第二〇一隊への作戦命令が発令された。これは八月十二日夜半のことであった。

那須飛行部隊にとっては、さきに二五四隊を平壌へ、第二〇二、二〇三隊を、小月へと作戦目的をあたえて送りだしていらいの出撃命令であった。さすがに全部隊に緊張がみなぎった。私の脳裏にはこのとき『分別にすぎれば、大事の合戦はなしがたし』といった戦国の武将黒田如水のことばがよぎった。

第二〇一隊は高品兵団長の命令により、鹿島灘洋上の米機動部隊にたいし、八月十三日、薄暮時を期して攻撃をかけることになった。各種の状況と技術上の判断からもっとも大きな突入効果をねらっていることとおもわれた。

二〇一隊は午後五時三〇分から午後五時四〇分のあいだに、まず小川編隊の二機が、つづいて小池編隊の三機が離陸し、聞きなれた爆音を残して普段の演習のときのように淡たんとして飛んでいった。

小川編隊は雲下を、そして小池編隊は雲上を、そしてこの雲上と雲下の航路の選定の差が、のちになって生と死の差となってあらわれたことをそのときのわれわれにはわからなかったのである。名状しがい気持におそわれ、

「自分がこの場にぶつかったらみごと離陸できるだろうか？」

と心にただした。

二〇一隊が離陸してまもなく、さきほどまでキラキラとかがやいていた真夏の太陽が、にわかに姿をけして、猛烈な驟雨がやってきた。あまりにもはげしい夕だちのため暗示的に感じられた私には、

「神話というものは、このような、こんな意想外の現象があらわれたときに生まれるのではないか」

とさえおもわれた。だが、はたせるかな、神話はやはりうまれたのだ。雲上をいった編隊は索敵不能で帰投したが、雲下をいったものは帰ってこなかった。小川、横山両機であった。

「軍の機密はまもらねばならぬ。軽率な言動はどのような不運をまねくかもしれない」

そのようなことばの意味を身をもって教えてくれたのが横山善次少尉だった。

彼はこの日、編隊長小川中尉とともに出撃する隊員の一人であった。第三番機の後藤少尉機の整備がまにあわず二機編隊で出撃していった。水戸出身で、明治学院出の温厚でハンサムな彼は、ハデな存在ではなかったが、飛行熱心な操縦将校であった。彼はあきらかに恋人とおもわれる美しい女性がいて、ときどき面会にきていた。

彼がその生命の全能をつくして敵艦に突入し、一髪すら残さず、太平洋の海底に没しようとする八月十三日の午前、彼の愛する女性は、部隊の入口にその麗姿をみせていた。とおりかかった私は、その二人に一べつをあたえてすぎ去ったがあとになって出撃直前の横山少尉に、

「きょうが最後になることを彼女につたえたのか？」

と私が質問を発すると、いつもものしずかな彼がキッとなって、

「貴様、なにをいうか!!」

といわんばかりのきびしい表情をしめしたので、私の胸はおもわずジーンとなったことを、いまでも私は那須のことをおもいだすたびにシミジミとおもうのである。

特操出身の彼はすでに〝悟り〟の境地に到達したりっぱな空中戦士であり、航空将校であったのである。

八月十三日、第二〇一隊の敵艦隊突入、八月一四日東京の一航軍司令部に出張中の土井高級参謀からの感状授与の伝達、そして八月十五日の終戦、と那須の基地は大動転であった。

二式複戦

当協会発行の書物

B—29との戦い　一五〇〇円
体当りと敵基地の片道攻撃

遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情
五十余人の残したもの　六〇〇円

特攻隊員の日記　五人　七〇〇円

特攻隊員を偲ぶ歌　三〇〇円
十三篇に絵や写真付

長い日々　一五〇〇円
出撃し被弾不時着した隊員の手記

愛は終りなく
戦没特攻隊員を慕う一女性の著書

以上値段は送料別
お申込あればすぐ送ります